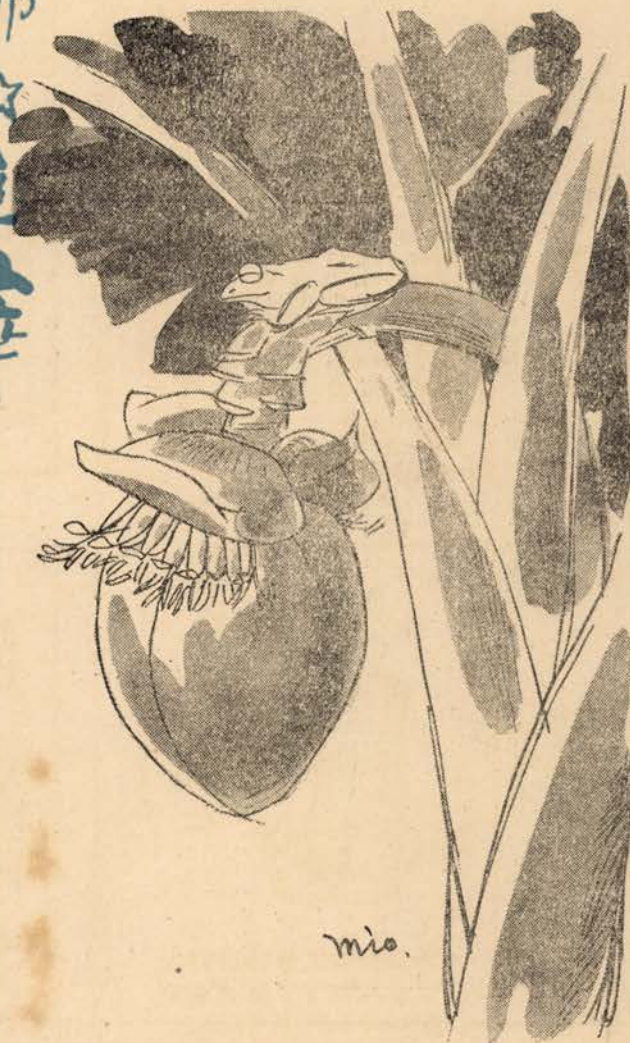


Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.303

麻生路郎 ☆ 主筆



八月號



八月号目次

題 字……………麻生 路郎
表 紙……………米田三男之介

川柳人としての笠原博士……………麻生 路郎……………(四)	朝顔の雲……………安川久留美……………(三)	川柳江戸武鑑……………阿達 義雄……………(八)	多数決にはかなわない……………路 郎 生……………(三)	文字のいたづら……………長野 文庫……………(三)	堀英四郎先生と語る……………阿倍佐保蘭……………(一〇)	ジョンの死……………麻生 梨里……………(五)	川 柳 大 学(2)……………頼田山雨楼……………(九)	路 生 句 抄……………頼田山雨楼……………(三)	川柳今月の歴史……………頼田山雨楼……………(三)	飛 燕 往 來…………………………(一〇)
★										
近 作 柳 檣……………麻生路郎選……………(二)	川 柳 塔……………麻生路郎選……………(六)	同 舟 近 詠……………諸 家……………(二)	一路集「プリント」……………吉田水車選……………(七)	各地 柳 壇……………小川恒明選……………(四)	柳 界 展 望…………………………(二)	川柳不朽洞会から…………………………(二)	編輯室にて…………………………(二七)			

不朽洞
会から

▲古川麗花氏
(ホノル市)の
來信によ

ると、軍人の花嫁として日本から渡布した若い女性が川柳に興味を持つものが多いのでうまく指導したら婦人間に川柳熱が高まるのではないかと期待されている由▼坂田良坊博士(下関市)のその後は気分は良好だが足が不自由で癢だとのこと氣永に靜養された。▼麻生路郎師は七月に大阪郵政局で募集された郵政川柳の選評を担当された▼等原路生博士(本会賛助大阪大名義教授)は兵庫縣武庫郡良元村小林北畠の自宅で療養されていたが六月十九日午後六時に腎臓病で永眠された。行年六十九歳。謹んで悼む。▼中村ただみ氏(玉野市)は玉野勞政事務所管内に誕生した健全娛樂協会の文藝部幹事に推薦され第一回川柳会を六月廿二日に備南高校教室で開催された▼藤本潤年氏(岡山市)の母堂が六月廿二日午前四時半暗瘻血のため郷里久米郡弓削町で永眠された謹んで悼む。葬儀は郷里で行れた由。▼直

原七面山氏(岡山縣)は三月中旬出勤以來、身体の調子もよいので本格的に川柳に精進されとのこと▲直原湖月氏(岡山縣)は永らく入院されていたが三日十一日に退院され、其後自宅で靜養されている夫君同様一日も早く全快を祈る▼池樂沢居氏は六月中旬に大阪市旭区新森小路中二丁目一〇〇河合方新祝詞奉誦会へ移られた▼佐野ト占氏(八代市)は春の旅行シーズンに一段落をつけ、これから海

新会員紹介

七月

坂井 三葉氏(岡山市) 正
満年氏推薦
政田 大介氏(岡山縣) 正
弓削平氏推薦

八月句会から

作句道場が變つた

座つて作句したいと云ふ御希望に添へて八月から作句道場を左記へ移した。極く取りよきところですから御友誼合せ御参加ありたい。

▼光明寺 大阪市天王寺区下寺町二丁目(下寺町二丁目市バス停留場前)――瀧順案内――
▼梅田方面、アベノ方面の方は市バスで市電利用の方は日本橋三丁目電停下車松坂屋北横を東へ突当り▼下寺町電停下車の方は南へ約二丁上六方面は下寺町電停へ一ト停留場

▲日時八月二日(土)後六時
▼兼題「名士」「味方」「ウイंक」
川柳雜誌社句會部



お手軽料理
30 圓 よ り

北極星スタンド

南区戎橋電停前

大阪が生んだ世界の

アサヒビール

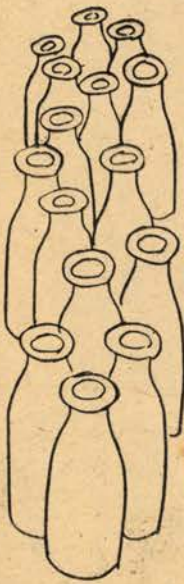
多数決にはかなわない

ムリが通れば道理がヘツこむと昔の人が教えて呉れたが、誰が何んと云つても阿呆と多数決にはかなわない。シヤニムニ「破防法」を通過させてしまつた。喜劇役者の天外に、時事諷刺がやれなくなるとなげかすところ、自由党の方が役者が一枚ウワテである。これ

ではウツかりした、川柳もつくれない。輿論の奔流を朗らかな川柳やコメデイの諷刺の中に発見することが出来ず、圧搾機で押し潰しさえすれば能事足れりとする政治家の貧乏脳をあわれむばかりである。市電で運転手をしていた雅剛と云う川柳家が、「従うて行かねば犬の首締り」と云う名句を

吐いて死んだが、この句の真意が判るような政治家はいないものかなア。従うて行つても首が締りそうなのがする不安な破防法だとすれば、隠遁親爺の芭蕉のように「物言えは唇寒し秋の風」と変に悟りますのも一策かも知れない。

當分は口縫うておけ縫うておけ



著 中 御 伺 川 柳 雜 誌 社



川柳人としての 笠原博士

麻生路郎

阪大川柳会の名作家として知られていた笠原路生博士（阪大名譽教授、川柳不朽洞会賛助）が六月十九日に兵庫縣の自宅で持病の腎臓で亡くなった。行年六十九歳。路生（ろせい）は川柳に於ける雅号で本名道夫と同音の路生を、みちおと読まずに、ろせいと称することにされたのであるらしい。川柳に手を染められたのは、いつ頃からかハツキリしないが凝り性であつただけに早くからいろいろなものを読んでいられたらしい。私は柳秀（長崎仙太郎博士）さんにすゝめられて作りはじめたのだと云われていたが、昭和六年の夏長崎博士と共に阪大川柳会をつくられた頃からの作家と見ていゝだろう。その後

の作品がメキ／＼と上達されたことは、昭和十年に阪大川柳会から刊行された句集「大川端」（不朽洞版）で異彩を放つていられるのを見てもうなづけよう。路生氏より早くから作家として知られていた柳秀氏を努力型の作家とすれば路生氏は天才型の作家だと云えよう。私は「文学博士になる管が医学博士になつたのだ」と述懐されていたことがあるが、その非凡な文才が、表現上自由な川柳詩に異数な発展を見せられたのだと思う。特に動物を詠んだ句に於ては当時の柳界に於て特異の存在であつたが、單に動物を詠んだ句だけが巧みだつた云う訳でなく。人間の心理を解剖

した句に於ても又凡ならざるものがあつた。博士は大阪の學者としては珍らしく學者らしい學者であつた。研究心の旺盛であつたことは云うまでもないが、物質には至つて恬淡であつた。そして大学に於ても云いたいことを云い仕たいことしかなかった唯一人であつたのではなからうか。この性格は博士に恒産があつたからと云う理由にならない

は配給米で余るときえ云われていた。Bの注射を毎日欠かされなかつた。大学の講義のある日は、二本普通の日は一本の注射を自らされた。散髪はいつしたか判らぬ様な散髪の仕方が好きで、すゝきが秋風になびいている風情があつた。阪大病院の屋上の理髪室の親爺はその点をよくのみこんでいたので、散髪はこの親爺に限られていた。狐うどんの好きな点、散髪をしましたと云う散髪のきらいな点その他いろんな点で私と多くの共通点があつたので、よく談があつた。好物としてはタバコだつた。食事のアトには何かいゝ色々取換えて喫つていられた。私もタバコ好きなので

で戦時でタバコが手に入らぬ頃によく葉巻などをもらつた極端な写真嫌いで、学生の卒業式でも学会の写真でも、中央に椅子だけ写つていて博士の姿はないのである。椅子だけうつしてあきらめさせるほど徹底して写真を撮られなかつた。私の記憶では阪大川柳会で句会情景に這入つて位のものだ。ある時、私に句集を出して欲しいと云われたことがあつた。費用は全部しますから、東京からでも何処からでも出して下さい。全部読んで見たいからと云うことであつたが、従来個人句集と云うものは、そう沢山賣れるものでなく結局は路生氏に迷惑をかけねばならぬので、おこさわりしましたが、そうしたことには平氣で金を出されるたちであつた。「大川端」の印刷費も、路生氏が立替えられたので、大半は金にならずあちこちに進呈されたらしい。川柳に熱心であつたことは、阪大川柳会の句会の日には欠かさず早くから出席された。ある時など、今日は奈良へ講演をたのまれて行つたが、時間を短かくやつて、奈良から自動車飛ばしたのでヤット間に合つたと云つて句

会へ顔を出された。これが普通の人であれば、兎も角、路生氏と来たら、いろんな会合に出るのが至つて嫌いで、婚禮にも葬式にも顔を出さないし、大学総長の催しでも顔を出さないと云う変り物であるから、いかに川柳を愛好されていられたかが知れよう。

戦時中のことである。私は阪大病院を訪ねようと思つて出かける途上、田箕橋の中ほどでハタと布施筑川博士と会つた。博士はニコ／＼笑いながら、「病院へ行かれても誰もいませんよ。これから総長の主催で、大学で、バンザイを云いに行くので、皆出かけましたから……オ、そう／＼」笠原先生ならいらつしやいます。行つていらつしやいます。斯うである。私は笠原博士をその部屋に時々訪ねたが、博士は部屋にカギをかけて、何人の訪問をも遮け、ひとり静かに読みたいものを読み、時には講談本を読んだり睡眠をむさぼつたりしていられたらしい。俗事を遮けると云う点に於て、コレほど徹底していられた博士は他にいられたかつたであらうと思う。

あの当時、川柳雑誌社は筑前橋の南の昭和ビルの上階に

表され、川柳の翻訳は困難であることの意見を發表されたことがある。筆者の川柳を百句ほど独逸訳してドイツへ發表して見たいから翻訳の出来さうなものを選んで欲しいとのことであつた。そして元且だせめて眼鏡を拭きませう

(路郎)

の句を訳して見たが「元且だ」の「だ」が訳せない。だから

を單に「！」であらはしたのではダメだ。この「だ」に三

百六十五日の悪戦苦闘の意味が含まれている訳だが「！」だけではそれが出ないと云うことであつた。そんな訳で拙句百句のドイツ訳は実現しなかつたが、幾句かは試作され

六角堂幾何学的に暮れて行き

目にも物を見せんとすれど金がいり
白熊の様に赤坊させられる

人を待つショールは鼻へつき上げる
春の背ふくれ上りし心かも

ほつれ毛が性慾的であるも朝
恋愛も三期になれば世帯染

あの爪弾は夕霧さんの部屋さます
回復期喰ひたいものを書いて見る

三の糸切れて久しくなりにつけり
山椒魚おのころ鳥といつた風

縮馬の輕快に似てハイヒール
白日の狸の顔はとばけて居

ライオンは何を小癪な顔である
つんのめる様に駱駝は起き上る

ネクタイの歪んでゐるが學者とか
白痴の美錦鶏鳥の尾は長し

鳥類の猶太人なるはげ鷹か
寝そべつて枕を捜す手は長し

あちらむいて女サツサと枕をし

柳の原稿で、しかも名文であつた。もう少し、いろ／＼と執筆して貰えたら川柳の發展上どれだけ役立つたか判らないが、ジャーナリズムとは相容れぬ性格の持主であつたので、宝の持ちぐされと云う感が深い。晩年の博士の生活は余所目にはかなり淋しい。

カフツ寫眞は笠原博士

すき見する脚ざりて来る鶴なりし

渡し舟女はしやがむものにきめ
プロフキールガンダーに似て羊ある

あけすけに舞妓閣下にものを訊き
デカンショになつて舞妓を顧みず

落日はトマトにも似てまんまるし
ジャガ芋があつて洋食らしく見え

君の指アスパラガスに似て細し
チヨカチヨカとして花婿は叱られる

バアテンダアコップをふいてとりあはず
送る人もなくて青森行は出る

長襦袢着ても女工の肩であり
あなたの妹より等と書き

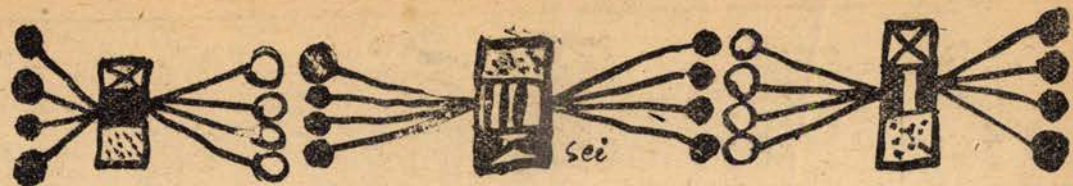
うだうだ云いなはんなど取るものは取り
ごりがんであるとあいつは持つてゐる

何でそれがと女將とりあはず
墨海は塑像の如く腕を組み

腹這ひになれば煙草を呉れと云ふ
まあこの位でと晝の猪口をふせ

姐さんの染直しとすと悪びれず

抄 句 生 路



川柳塔

横濱市 福田山雨楼

路郎先生に十年振りに拜眉（六句）

颯爽と初夏の師は六十三

熱論に昔の意氣がそのまんま

咳靜りて師の情熱に動かされ

おそる／＼傳記の稿を師に呈す

全國がわが家の様に旅カバン

師に会えば死んでも名残なき身体

桐の雨潤一郎の若き恋

女教師と警官一幕物になり

冬になれば満布團と妻云うてくれ

派出好きに非ず安物を買ひしのみ

ホノルル 内藤草一郎

入婿の悲哀お酌もして呉れず

パトロンの貴録飲みつ振りに見せ

ライバルと花屋で会つた間の悪るさ

不感性ですごヒスリもせず笑ひ

損をした様に晩婚くやしがり

尼崎市 水谷 鮎美

釈妙秀（十三回忌）

鮎の骨ぬいて精進上げ靜か

鏡の奥に若手は惡魔めき

岡山縣 浜田久米雄

発車ベル留守を頼んだ声になり

礼狀が来るまで美談はつとかれ

扇風機こいつも腹の黒いやつ

大牟田 高田抱逸

トロ押しの特を惜るのも好いてゐる

未遂から阿蘇で硫黄の入夫する

米子市 三鴨美笑

別れるにそんな化粧もいるのかね

本妻が電話に出たで切つてをき

隣の娘まさか意見もしてやれず

万年青の根洗うてやろか日曜日

野球帽子供朝から離さない

薄物を着て来た姉はまだ若い

ホノルル 白砂旋風

運の向くまでの苦勞に言及し

月賦制追いまくられて哀なり

大阪市 須崎豆秋

修養と云うてバスを待ちつゞけ

アベツクの時間も卓上メモへ書き

陳情を鼻くそほじりながらさき

歌舞伎座へ行くそこらちう鍵かけて

パチンコの玉を落した電話室

田植田植邪魔になる娘に手傳われ

大阪市 正本水客

押入の風が寝ている顔へくる

香爰のメする祝かわいて居

海岸線の通り初恋歩くなり

スカートは弔辞を受ける坐りよう

隠れ住んで寛の水も夏になり

あほの一つ覚のようにパチンコ屋並ぶ

大阪市 丸尾潮花

チョコレート喰べて師匠はまだ二十才

薄皿三味ひく指の美しく

式挙げてしてもたら好きになれそう

大阪市 北川春巢

へそくりの出来ないたちを妻こぼし

頓服を上げますと医者あわてない

分別もなく黒髪をちららせて

文楽「毛谷村六助」

六助の肩動いたを見逃さず

「壹坂靈驗記」

人形の身軽さアツと谷へとび

奈良縣 尾崎方正

氣を悪くするほど並ぶ白い羽根

鼻高し洋服掛と云う形

たま／＼行けば銀行三時まで

老先が近い觀光誘はれる

中折れもくしや／＼に寝る終電車

下関市 櫻川不水

うるさ型酔ひつぶされて放つとかれ

な／＼だ君も入歯か五十四五

ミス日本其の後悲しく輝けり

毒草にしては笑くばが可愛過ぎ

針のみぞおちよば口でも通り兼ね

大阪市 菊沢小松園

あどばるんふんわり使命果してゐ

涙涸れ切つた唄とは知らず褒め

市場筋あはれ人妻籠を提げ

岡山縣 大森風来子

席を譲り合うスカート風はらみ

一匹の蠅に顔ふる手内職

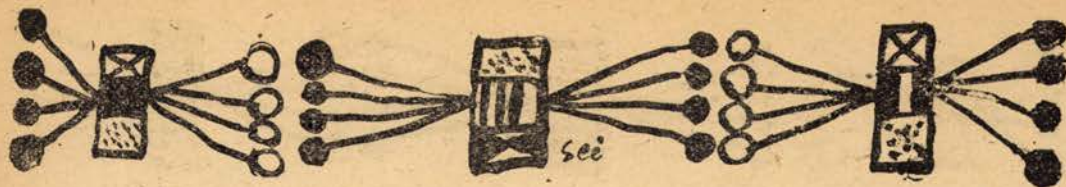
出雲市 尼緑之助

ビールすゝめて欺瞞のかげを見る

まろびゆく姿かストも右左

廣島にて

原爆地イサムノグチのニールツク



大阪市 水谷竹莊

ベチャリツと落ちて熟柿は安心し

逢えばすぐ時計氣にして叱られる

岡山縣 直原七面山

噂もう師匠と弟子の仲でなし

脚組みし旅の女よ何処へ行く

投げキッス若い氣やなど冷かされ

もう少し色氣がなどと擲擲はれ

旅の思ひ出

善光寺やつぱり金の事にふれ

滝の水キッスの音を消して落ち

一人寝りや思ひの外の廣い部屋

名月かそうかと母は針を持ち

たゞくれる物に昨日の臭ひする

明日知れぬ命で患者笑んで見せ

ヤットン節明ひ乍らに子が戻り

町長になり尋卒がチト淋し

友の妻友と別れて若くなり

通動車雀の様にみなしやべり

八代市 佐野ト占

大火その後

鳥取市 河村日満子

高貴藥ベタ／＼はんこおしてあり

お見舞の支出こつちが罹災めき

嘘いはぬ人じやといわれ金をかし

オタマジヤクシの樂譜を夫婦もてあまし

大阪府 渡辺孫拙

罹災兒童を慰問して

兵庫縣 家沢薺花

氣心が合つて容赦なき皮肉

目覚しをゆすれば二分程動き

色あせたボスターに似て退職す

ひからびた茄子を場末は山に盛り

大阪府 富岡淡舟

新婚と云う同僚へ傘が来る

しらん振りしたけど胸の鼓動たかく

春はよし修学旅行の子にまじり

奈良縣 飯降白香

滋賀縣 黄瀬美秋

本線と知るクツションの揺れ心地

ふたり来てパチンコ仲よく負けて去に

山口縣 長野井蛙

ワンマンはこゝにもおつた職場なり

客引きがいきなり靴引つ奪り

古橋も及ばざるなり世を泳ぐ

大阪府 麻生梨里

友達という幸福なものを持ち

泥臭い河で恋の灯ボートの灯

二日とはもたぬきのうのわが怒り

岡山縣 丸山弓削平

パチンコも知らず男の端に座し

お花見に来て暮しのことを言ひ

競輪で稼いだを女見逃がさず

岡山縣 徳島縣 姫田夕鐘

意見してあと一本つけてやり

たゞ歩くだけの心斎橋なりし

道後でも連れて行つてと酌ぎながら

岡山縣 丸山弓削平

意見してあと一本つけてやり

あきらめてオールドミスは左傾する

意見してあと一本つけてやり

熊本縣 西口如川

独立へ或る日訓話の念が入り

投身へ阿蘇は自然の儘だつた

岡山縣 福島鉄兒

氣の毒やけれどこつちも火の車

暫くは阿呆になつてみる養子

岡山縣 直原湖月

ピクニックたゞ雲だけを見て帰り

身の程も知らず理窟を並べたて

附添の要る年頃で名取りとか

名僧の頭デコボコ／＼し

死を願う患者へ若い医者あわて

花晶にしやがめば妻も美しく

新聞の故郷のニュース囁んで読み

岡山縣 服部十九平

雨の日を待つてた様に書く手紙

衰えを円熟して来たなどと言ひ

スイトホーム家計に触れないことにする

あれこれの夢みな褪せて倦怠期

恐妻家被告の様にものを言ひ

尼崎府 長谷川三司

無氣力な夫へ着せる襪け糸

金ためず廣告マツチ留めて居る

人様の儲け話しへ茶をよばれ

大分縣 桑原養痴園

蛇が出て二号の家へ遠まわり

形見分け妾の分は定まつてゐる

大阪府 足立春雄

ダンサー募集女は生きて行けるもの

金魚賣水の重さの腰を揺り

井当箱曰く警棒の跡です

熊本縣 有働芳仙

都心から遠く食用蛙鳴き



大阪府 浜 畑 胡 蝶
蠅叩き背中いやほどどやされる
若けりやしたいと笑う隆鼻術

下関市 阪 田 良 坊
独立で暴力議員復古調

下関市 石 川 侃 流
会いに行く心の奥を見た燕
百姓でなくて空梅雨うれしが

岡山縣 水 田 草 骨
株買うてみても不運に生れつき
子供らにあかれて金魚無事に生き

玉野市 中 村 た だ み
コレクシヨン趣味で空くじまでためる
灼熱の恋を乗つけてボート古り

大阪府 山 本 葉 光
金魚賣りあれも働く姿なり
老母病んで眠る楽しみだけとなる

大阪府 東 喜 久 堂
掃除洗濯病人しばらくはつとさかれ
靴直し馬鹿に出来ない金を貯め

大阪府 鈴 木 天 貧
藝者から挨拶を受け得意なり
清貧の藥草等をたより病む

大阪府 鈴 木 天 貧
柱に背すりつけ痒いところを掻き
倉敷市 木 村 千 代 男

倉敷市 木 村 千 代 男
他人にはまさかと思ふほどやさし
一株も有たぬが重役づらをして

岡山縣 田 垣 方 大
委任状出せといふからだしここか
朝風呂で歌舞伎座の垢落しけり

岡山縣 田 垣 方 大
袖の下遊びに來いが謎だつた
ローカル線牛のお産の話なり

石川縣 那 谷 光 郎
妓から一人で來てねを眞に受ける

脱税を黙認させる程酔はせ
銭のない間借りの顔は窓により
古新聞妻の余得が秤られる

往診の婦りに土筆摘むも女医
ある内は飲みなど酒瓶ふつて見せ
いたづら子を叱れば我が子もまじり居り

勝ち過ぎた理性がキツスようさせず
パチンコで食つて居ますと懐手
大阪府 木 村 水 堂

隣りから不足の種を持ち帰り
お悔みを女台詞のように云え
金の要る話を女たんと持ち

熊本縣 花 岡 英 子
沈黙を守りきれないのも女
駄だつ子と叱つてほしい程にすね

堺市 八 木 摩 天 郎
先生の恋へ可愛い批判をし
仲居さんバラバラに坐るなり

大佛にて
久方に見る大佛の裏表
物理的愛情ねえと十八九

お寺さへ法人となる世の移り
首飛んだ昔の城にラムネ店
高槻市 福 田 丁 路

食いものにされて會長得意なり
首きりの噂に思ふ事多し
唇を狙うて祕書に蹴飛ばされ

岡山縣 水 谷 谷 水
熱心なことをグズだが買はれどり
だらしなく寝ていて好きなものを喰べ

岡山縣 佐々木告天子
闘牛場でなし人民廣場なり
氣の弱い公民館を覗くだけ

岡山縣 佐々木告天子
闘風一過人工の哀れなる

先代の遺業を捨てパチンコヤ
ガムかんでよつてくる娘に逢ふ場末
岡山縣 峰 尾 魚 々

妻の下駄ゆるい鼻緒にして返し
人違い黒子も同じどこにあり
岡山縣 岡 田 夜 潮

両岸をふんばつて女芹を摘み
念入れた生花ちつとも見てくれず
刈草を負うて大きな入陽見る

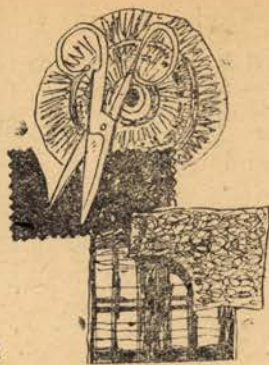
行きたがる子をつれもせず厚化粧
やせ犬がうろつく場末おしめ干す
岡山縣 中 谷 仙 坊

やりくりを教へた方も赤字なり
電産の本部ローソク買うと云い
岡山縣 政 田 大 介

女房の口でミシンが一つ賣れ
捲き上げた金で燕が養はれ
日曜の野良を女房に指図され

岡山市 坂 井 三 葉
飛行機え老婆の腰が少しのび
新婚の夢がはかない子が五人

たつぷり
愛嬌たつぷり
B1 たつぷり



川柳大學(Ⅱ)

川柳と文学

福田山雨楼

國文學としての川柳

昭和六年の頃岩波講座の「日本文学」が会員を募集したことがある。その時に取上げられた項目の中に川柳を見出したことは當然と云えば當然だが、川柳家として何か救われたような感じを受けたのである。というのは當時の川柳というものが文壇的に下積みであつたし、國文学界からも輕視されていたからである。そこでこの川柳の講座を担当したのは外ならぬ刑法學者の岡田朝太郎であつた。これが井上劍花坊とか麻生路郎というのであれば、俳諧俳句において頼原退藏、小宮豊隆、志田義秀、岡崎義恵、各務虎雄らの文學者と並んで格好の執筆者だと肯かれたであろうが、岡田博士とあつては余りにその名前に捉われた感がないでもなかつた。無論博士

は古川柳研究の權威者であり、萬句合の蒐集と柳樽の分類整理において博士の右に出る者はなかつたのであるが、久良伎から狂句博士という悪口を聞かされたほど句の考証に終始されたのである。そう云うわけでこの岩波講座にあげられた博士の講述は古川柳の沿革と句の姿は明確に浮彫されたのであるが、句の藝術味の鑑賞とか文學理念の解明には一指をも染めていらぬ嫌がある。

國文學者の中で古川柳の研究に熱心な方が少いといふことは、古川柳が學問的對象として價值が低いことを示すものであろうか、否決してそうではない。現に故頼原退藏博士の如きは、俳諧史研究の蘊奥を極めるため江戸時代語の研究からその眞髓とも云うべき川柳、雜俳の用語探求に生涯を捧げられ、麻生

磯次博士は「俳趣味の研究」「笑の研究——日本文学の洒落性と滑稽の發達」「川柳と雜俳の研究」等の著書で古川柳に対する深い造詣を示していられるのである。また古くは響庭簞村、芳賀矢一、佐々醒雪、沼波瓊音と云つた學者が古川柳研究の先鞭をつけており、現代に至つては藤村作博士を始めとして、久松潜一、近藤忠義、能勢朝次、岡崎義恵、鈴木重雅、故山口剛の諸氏がその著書の中で國文學としての川柳に就て蘊蓄を吐露していられるのである。しかし後述者がまことに少く國文學界川柳輕視の傾向が顯著であることはなげかわしい次第である。思うにこれは古川柳の研究が一見容易の如くであつてその実至難であり、勞多くして功少きに依るのではあるまいか。

その段になると今は故人となつた三面子、柳雨、卯木、幻怪坊、三椒、百樹、花月、虹衣、虛心、木卯村、梅仙、眞弓、東魚らの古句に捧げた獻身的努力、現代では最長老塵山翁を始め、省二、辰二、未知庵、摩耶火、鐸、駒村、閑古、義雄、重雅、謙堂、金四郎、鞍馬、英雄、柳石、正信らの諸氏が孜々として倦むことなく古句と取組んでいられることは、その多くが私學的、獨學的研鑽の勞作であるだけに涙ぐましくもまた尊い業績と云わねばならぬ。名利を超越し清貧に甘んじ、しかもかわらざる熱情と愛情なくしては到底至り得ぬ境地である。こうした刺の道を承知の上でこの道に志す後継者は果して踵をついで現われているであろうか。残念乍らその寂寥を嘆ぜざるを得ないのである。

かくして國文學としての古川柳研究陣營は次第に寂寞の度を加えつゝあると云つても過言ではないと思ふ。これは由々しき問題と云わねばならぬ。

現代文學としての川柳

子規は俳句を革新した。子規は「俳句は文學の一部なり。文學は美術の一部なり。」

暑中御伺

澤田四郎作

小兒科・田沢醫院

大阪西區玉出通本一ノ三

戸倉普天

兵庫縣米上郡沼貫村
字小野

木下幽王

大阪府阿倍野區帝塚山
西一丁目十一番地

北川春巢

大阪府北區東扇町二一
大阪市交通局病院内科

故に美の標準は文学の標準なり。文学の標準は俳句の標準なり。即ち絵画も彫刻も音楽も演劇も詩歌小説も皆同一の標準を以て論評し得べし」「一般に俳句と他の文学とを比して優劣あるなし」と号した。この烈々たる精神と信念が彼の一生を貫いていたのである。

川柳は明治末葉久良伎、劍花坊によつて復興され、次第に隆盛を致し戦争中一時中断の浮目を見たが、戦後復旧して今日の盛況を呈している。

しかし今日の盛況は決して偶然ではないのであつて、幾多先覚者の血の出るような苦闘と不退轉の努力が結実したものである。数多い先覚者の中でも路郎先生は特に川柳の文学的向上に盡瘁されたのであつて、既に明治四十二年の頃から川柳の革新に心を碎かれ、「雪」「後の葉柳」「土團子」等意欲的な新興誌を刊行され、「われ柳壇の子規たらん」との決意を以て常に川柳に臨まれたのである。昭和七年五月四日わが川柳雑誌は創刊百号を記念し朝日會館で川柳の夕を開催したのであるが、その際路郎先生は大阪商大同窓会々員の諸氏に次のような挨拶状を出された。「村本教

授と同時に母校を巣立ちました私ですから、ごつくの昔にどつかの会社の重役室で薫り高い葉巻でもくゆらしてゐなければならぬのですが、もつて生れた拙者ですからいつの間にかにやら貧乏と仲よしの文学畑で終始してゐます。御承知か

★ 池邊樂居氏より

路郎宛

拜啓白鷺城下を去つてもとの古集の大阪に舞戻りました。姫路に於ける一ヶ年の足馴らしによつて自信を得、かねて主張せる佛典の格よみ廃止と「ノリト」の改作に微力を盡し神社人と僧侶の覚醒を促したいと存じます。すばらしい構想で近く発足致します「新観詞」は既に発行しました（以下略）六月十六日 戸倉普天氏より

路郎宛

三月月振りに上京。三十年振

飛燕・往來

の例をあげてみよう。昭和三年の頃路郎先生は本社で川柳月評の会を設けられた。自分は当時駆け出しの向う見ずであつたがこの会に呼ばれて非常に光榮を感じると共に、路郎先生をはじめ紋太、松郎といった重鎮の顔振れに驚いた

り、堀切菖蒲園に昔を偲びました。今は只一軒を残すのみながら適者生存の原理に因るものから大繁昌入園料四十円を徴収して只見るだけの客も多く、如才なき限りなるを思う。東京は男も女も其服裝に於て遙かに関西に劣り、電車の中なぞ婦人の美しきを見ず、どこ迄もインテリ風を感じるのみであります。慨してしつかりと大地に根を下した生活をやつてゐる人を見ないのも現代社会の罪でありましょうか。二十三日帰ります。六月二十一日車中にて

しかも句の論評検討の態度の眞剣さに打たれた。そこで自分はこの月評会を川柳大学に学ぶの思ひで生命を打込み、爾來数年に亘るこの会に出席を助んだのであるが、路郎先生の終始変らぬ嚴正な態度と熱心な文学論に敬服したのであつた。先生のこの文学的意氣に感じ百萬人と雖もわれ

行かんの臍を堅めて自分は驚馬に鞭打つてゐるのである。紋太氏の熱心さもまた忘れ難い。わざ／＼月評の都度神戸から大阪まで足を運ばれ、淡淡と語られる句評の中に盡きぬ川柳文学の泉が流れてゐるようであつた。戦後、文学の興隆に伴つて川柳界にも熱心な川柳文学愛好者が擡頭し、前衛派或は新興派と入り乱れて詩論、川柳論を闘わしてゐるが、徒らに傳統を排撃するの風がある。一方傳統派は旧守退嬰に泥み革新向上の氣力に乏しい憾みがある。そして両者が文学的交流を持たず互いに二つの平行線上を走つてゐるごころに病弊がある。もつと虚心坦懐、胸襟を開いて現代川柳の批判、語り合いをなすべきである。吟社廻持ち主催の句評会なども計画されて可然ものと思う。句に對する眞摯な検討が川柳文学の根を張る原動力となるからである。子規ほどの天才も俳句革新の基盤として俳句の分類、俳家全集などの基礎的勞作として、数年間心血を注ぎ遺した原稿は積んで数尺の高さに達したといふことである。今や文学の世界にも批判が益々厳しくなりつゝある。小説でありさえすれば読まれた

暑中御伺

橋本 綠雨

大阪市東住吉区平野
西之町八三
電話天王寺①一六七番

須崎 豆秋

大阪市阿倍野区旭町
三丁目一四

佐野 ト占

川雜八代支部

長野 井蛙

山口縣小郡

西尾 葉

大阪府中河内郡曙川村字
八尾木電話八尾一七三番

土井 文蝶

大阪府西成区松通
九丁目二十二番地

時代は去つた。現代川柳もまた厳しい批判の対象とならねばならぬ。安易な態度を捨ててどこまでも眞剣に取組むべきである。

川柳文學の將來

川柳は近世後期文藝として生れたものであるが、同期生である黄表紙、洒落本、滑稽本、人情本、読本、合巻、狂歌の類が時代の流れと共に、その命脈を絶つたのに反して独り川柳のみが今日進歩を遂げていることは、非常に意味の深いものがあるのであつて川柳の將來をトすることができである。即ち川柳は文學作

品として格好な娛樂性、教化性、藝術性を備えており、時代と共に歩み社会と共に、進んで来た短歌や俳句と共に日本人に愛され親しまれた短詩である。しかし川柳が今日の状態で推移することに満足してよいであらうか。われわれはここに深く三思せねばならぬのであつて、陳腐、低調、無氣力、宿弊の数々を建直して清新にして意欲ある作品を創作することに腐心すべきである。

それから川柳家として最も強く銘記すべきであらう。千百の駄句よりもいのちある一句である。この文學精神が何より肝要である。豆秋氏は寡作であるが發表された句には氏の風格とユーモアが溢れている。これでなくてはいいない。この心掛を以つて進まねばならぬと思う。更にわれわれが川柳文學と対決するに當つて常に心掛けていなければならぬことは、昭和十六年六月号の本誌に路郎先生がのべられた「輕文學に終る勿れ」という言葉である。先生はこう云つていられる。

「(前略)世間では川柳を市井の一文藝に過ぎないと思つて、これが研究を忽緒に附してゐるが、私自身は川柳をしかく輕文學視してはゐない。(中略)靜にて私は思ふ。今にして川柳人が川柳を再検討し眞にその價値に傾倒し、地方文化の根幹として人間陶冶の大使命を果さなければ、川柳は永久に市井の輕文學に終るであらうと(後略)」「まことに烈々たる氣魂のこもつた叫びである。この言葉は「一句を遺せ」「いのちある句を創れ」「非凡であれ」とみな一貫するものであつて、今日までの川柳革新に大きな役割を果して來たのであるが、更に明日の川柳と取組む場合にも決して忘れてはならない箴言である。

道頓堀川柳社

脇田梅子

陽を仰ふぎ

こゝろ豊かに
ぼろを着る

大阪市南区西櫓町

二十一

電話南三三二九

同舟近詠

松山 前田 伍健

その昔名妓であつた金させる

本名は野暮な女優の電話帳

よく眠る女が前に汽車え倦き

たしなみの香水いやなお婆さん

金沢 安川久留美

うつぶせた本病人は諦める

牡丹刷毛ゆうべのチップ考へず

税務署の方なら二階すぐに貸し

呉服部の和服に昔憶ひ出し

白足袋をはいて飛ばした頃のこと

逆立ちに五十に近い身を忘れ

花生ける女房へ負けす句を作り

東京 富士野鞍馬

疑問まだとけず博士の鼻眼鏡

雨つづき河川の豫算ありやなし

東京 阿部佐保蘭

どつちにも反省があり朝笑う

暑中御見舞申上
ます

平常の御芳情を
感謝いたします

大阪市教育委員会
教育委員

脇田 勇

諸の恩忘れた頃の世は平和	同
親切に風邪引きますと傘を貸し	同
保険屋の根氣まだゝ衰へず	同
養老院がよかると嫁へあてつける	高知市
花曇り妻には頭痛する日なり	同
肩の凝り税の重さを考へる	同
人情を捨て、貯金をするときめ	同
モーニングズボンをつくに潰し	具塚市
株持つてから沿線に家を建て	山田
千円をくす光を買ひにやり	同
P.T.A.小さい椅子にかしこまり	同
悪銭を養やむ様な世とはなり	石川縣
実行がして欲しいのと云う構え	同
挨拶にコツテリ嘘を交ぜていゝ	同
押の強さ丈けで有名なうち	同
裏面史で見れば女も弱くなし	今治市
虎の威を借るを側近とか申す	同
大都会鯛も化粧をして居ます	同
營業用の秋波に酔つて引つかゝり	同
四十年いつでも母が先に起き	津山市
汚職する程の出世しておらず	同
黙つてること親孝行のうち	同
ベレー帽なにをかこう看板屋	同
夏衣装斜線の如き女にて	高田市
石室の秘の秘は中の濕つばさ	同
看板を又塗り替へた証券屋	同
よく判りましたと云はぬ相手なり	同
お土産によく見ておけと鶴は	貝塚市
ワンダフルなご世辞は抜け目なし	河楊
君命はなし予備隊員ギター弾く	同
大学というが警官氣に食わす	同
	梵鐘

目で媚びて甘えて女隙がなし 廣島市 福岡葉留路
 念佛を氣軽るに云える年になり 同
 エプロンの白き國婦をふと思ひ 同
 ネットレス腕輪で足らイヤリング 同
 左遷されて東京弁は淋しいね 具塚市 芝 無骨
 歳のことによれて婦長が席を立ち 同
 エロ本を選つて肩をたふかれる 同
 油蟬なき葬列が角まがる 同
 老母けうスブンレースへ若返り 岡山市 山本 焦兒
 夢くづれくゝて家庭審判所 同
 只腹が立つなり昔の預金帳 同
 不具の子え又遠足が通り過ぎ 同
 君嫁くを祝うて何となく淋し 東京都 石居 高志
 同僚の夫人を見舞う
 死を悟る人に見舞の言葉なく 同
 上役が休んでる間に認められ 同
 追かける倅紙風船程度 愛媛縣 渡辺 曉童
 物賣のお茶を出されたあわてよう 同
 女から氣を許される年さみし 同
 案内の時刻を守り慌てさせ 愛媛縣 藤田 博人
 言過ぎた事にはふれず子をアヤシ 同
 馴れて居る叱言と妻にあしらはれ 同
 和服着て花の先生とまちがわれ 大阪市 西川 惠風
 日曜日金使うなど雨が降り 同
 愛嬌がないと十五の娘を案じ 同
 何流か娘は赤い花を買い 高田市 小川 砂
 看板がネオンになつただけ儲け 同
 法隆寺焼けた壁画は別に見せ 同
 ヒョコ見つめてる微笑ましき馬鹿 雅人改メ 大牟田 小川 普二
 姉さんと二人つままない散歩 同
 ペン握れば小切手という身分 同

早いやうにも思う、夫れは路郎氏が發行せる「雪」によつてうなづかれよう。

私が弘美氏を追悼した「戦争」はこの間でも構はない。もう一度彼がこの世に詩の種子を蒔いてほしかった希望なのであつた。根が切れても生きている……その強い執着も、不治の病魔にかたず遂に、

秋風のごさつと吹けば死ぬだろう

の句を残してこの世を去つた。私は毎年朝顔の咲く季になると彼氏を思い、更に俳祖の芭蕉翁を偲ぶ。

朝顔にわれはめしくう男かな

酒豪の門弟其角に送つたいまじめの句だぞうである。此芭蕉の一ツの悟りも弘美氏の諷めも、亦ナドソンのよめる詩も何かこの世に共通がある。ナドソンも世界の一隅の詩人であれば、國と國の争いなどは愚の極みではない？自然の死はとどむる術もないが、いまの世に劍ならぬ文明の方による無惨の死は、その人の靈魂や何處へ行く一、私は生死のけじめを夢のやうに、今年も背戸の朝顔の花に眼を醒ましたい。

文字のいたずら

長野文庫

某代議士が演説中、片山折口君云々と屢屢發言するので、姿に思つて居たり、これは他人に演説原稿を依頼した爲、片山哲の哲の字が間のびして居た結果と分つて大笑

禁めた酒ヤツトン節で又初め 岡山縣 藤井 泉声
待ち呆けチューインガムの味に似て 同
形式に走る課長は元少尉 同
金になりそうへ附添茶を沸かし 見塚市 津田 千舟
看護婦の恋に檢温待たされる 同
バラ／＼にしてもよいかと嚇かされ 同
バットばかり吸うて課長も子沢山 和歌山 滝谷 右郎
停年が職をさがしてしま 同
席上で娘あくびをしてしま 同
轉業と云へばパチンコ屋と問はれ 出雲市 久家代仕男
言うて欲しい様な口止して帰 同
ストリップショウこれでもか／＼ 同
べんちやらも混せて停年迄勤め 岡山縣 國枝 朴仙
シンガーを隣が買えば負けず買 同
ペンダコが出来女事務茶も汲まず 同
堤防で山羊が見ていたラブシーン 鳥取縣 日置 文笑
山男なりやこそこんな景色も見 同
恋人が叱られてゐる社長室 同
社で労組家ちやヒステリ持てあま 具塚市 池内 両成
汽車通る度に揺れてる宿なるも 同
白衣着て街で立てない性格で 同
指輪をばはめて銀行守衛さん 和歌山 浅川 桑南
産んで置きなされど女医にめられ 同
この子をば望ろそうとした過去もあり 同
伯母も来てもう財産へ嫁がす氣 山口縣 岡本 鳥石
あけすけな娘と見合ひしてそれつきり 同
読んで居る本とは知らず蛋が来る 同
回診の医師へ多情な目がからみ 具塚市 武安 嘉彦
春風が脱いだ上衣を吹き抜ける 同
香水の匂ふリーダー伊達に繰る 同
恋をすりやしたでセンチな便りくれ 倉敷市 野田素身郎

紹介をした夜唇もう奪い 同
夢多き乙女で浪花節がすぎ 同
踊りなら阿波で踊つて來たらどう 岡山縣 難波 鴻峯
先きまで將棋差し居て卒倒し 同
片足は蚊に投げだして將棋指し 同
パンの数お隣さんは子沢山 京都市 佐久間折草
眼覚は子供が持つと巻きたがり 同
すしを巻く母の手先に春があり 同
病人の時計きつちりブーと合 京都市 若山 圭草
はなれ住む胸に子が住む妻が住む 同
さし上げて写す子供へ雲も入れ 同
母さんへ仕送りもするイヤリング 大阪市 吾郷 玲人
大阪で知る商人の底力 同
お前らは映画に行けと生ビール 同
挨拶の様に夏瘦指適され 大阪市 麻生 P O E
くらげ曰く僕はアブストラクト派だ 同
ソファアームも笑へ七光りの僕 同
女学生笑ひが止んで撮される 京都府 田中 南桑
吊皮のうぶ毛それとなく見つめ 同
恋仇宿の廊下で出逢うとは 同
植木屋がそろ／＼仕舞ふ雲の峰 京都市 鈴木加代子
これが恋と云ふものか食慾おどる 同
貸ボート許されし恋愛しき日 同
ホルモンだヴィタミンだ 涼み台 大阪市 石田 沐天
立法へやつさもつきのストの垣 同
順番に部長課長とひつばられ 同
身を落す決心にぶる牡丹バケ 大阪市 永田都誌子
片田舎老舗の賣れる町となり 同
情熱の歌人はついに家を捨て 岡山縣 岡野風の子
折づめが出て弁当がじやまになり 同
ネツカチーフ自ら素性を物語り 大阪府 大橋 荷村

いされたと雑誌に書いてあつたが、先日当地の新聞にも「独音本の諸問題云々」とあるので、一体何のことだろうと思へば「独立日本」の日と立とがクツついて居るのであつた。又一家の忠とあるのは、一家の中心の意味と分つた。原稿が悪いが、文選工が誤つたか、校正が居眠つて居たのか、文字のいたすらか。ところで最近全国的にパチンコが大流行であるが、当地でもその例にもれずパチンコ屋が五十余軒あり、それぞれ工夫して客を引いて居る。京町の映画街附近には十数軒の業者があるが、その中でパチンコと大きな電気看板を出して居る店の「パ」の字の電燈が切れて居る。その隣のイロハ食堂の同じ看板が同じ様に一字切れて「ロハ食堂」と読める。何れも電氣が切れて久しいが、未だ修理せず、其儘になつて居るが意識して放任して居る様にも思われる。この両店の看板が氣になつて以後町を歩く度に看板に注意して居るが、時々脱線したのを見受ける。外人が寄りつきそうに無い理髪店が、BARBERと書いて居るのは未だよいが、RIHATUと書いてあるのは何の爲だろうか。或るラジオ屋にRAJIOと書いてある。他は全部RADIOであつた。HUIZY A帽子店あり、FUIZY A服地店あり、IOE、OAKEを賣る店があり、AISUKEIKIを賣つて居る店もある。後者はイミテイシヨンかも知れない。

今治から波止場へ行く途中〇〇タオール会社と云うのがあるが、タオールのオの字が一字碎けて居るのでタル会社と間違われそう。本町の「たくばや」常盤町の「シマヤ」は横書き看板だが、前者は「やばくた」(方言で無茶な人の意) 後者は「ヤマシ」と読めて一寸可笑しい。廣小路のたれもの屋

零落れてまだ骨董に未練持ち
アベツクのほか誰も来ず大悲閣 芦屋市 同
里田一ノ十

アメリカンサーカス

象の糞湯氣の立つのをまのあたり
同 同
岡山縣 岡田 青果

蠅を打つ女巨きな尻の巾 岡山縣 同
同 同
別府 狂一

慶應の人まだ生きて濁り酒
同 同
大阪府 堀 不漁

たわむれの恋には惜しい今日の月 同 同
同 同
堀 不漁

友情も主義には代えぬ二十代
同 同
岡山縣 堀 不漁

ライバルの服の柄まで氣に喰はず 同 同
同 同
堀 不漁

送別会誰れもは知らぬ事をほめ 同 同
同 同
堀 不漁

シヤボテンが庭でころんだ夏 同 同
同 同
堀 不漁

逢ふ人があり日曜の蛇の目傘 同 同
同 同
堀 不漁

押しおされるにビル建つ露路に住る 岡山市 同
同 同
堀 不漁

外勤の椅子は事務所で邪魔がられ 同 同
同 同
堀 不漁

封建の親なればこそ処女ですよ 赤穂市 同
同 同
堀 不漁

放哉が寂しがつたもあの月上 同 同
同 同
堀 不漁

焦げ臭い匂い話の腰を折り 岡山縣 同
同 同
堀 不漁

本心を酒で呼び出す氣の弱さ 同 同
同 同
堀 不漁

酔う程にカナカのカナカは目に痛し 布哇 同
同 同
堀 不漁

ウクレレを止めてカナカも月を賞め 同 同
同 同
堀 不漁

のど自慢またどうぞにも金が要り 尼崎市 同
同 同
堀 不漁

もう逢えぬふとそんな氣が踏む落葉 同 同
同 同
堀 不漁

火元から遠いと盃持ち直し 岡山縣 同
同 同
堀 不漁

録音え地方訛で吐く意見 同 同
同 同
堀 不漁

女は損そうゆう女が尻に敷き山口縣 同 同
同 同
堀 不漁

療養所器量のよいのが寂しがり 同 同
同 同
堀 不漁

針供養師匠も少し塗つている 岡山市 同
同 同
堀 不漁

パチンコ屋花輪が綴せて寂びれ 同 同
同 同
堀 不漁

負けぬ氣が過去を持ち出す未亡人 和歌山 同
同 同
堀 不漁

今にして功ならざるは女ゆえ 同 同
同 同
堀 不漁

猫までが夫婦喧嘩をながめてる 岡山縣 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

鉛筆でふけ落してる廻椅子 同 同
同 同
堀 不漁

氷へだけは蠅もごまらず愛媛縣 同 同
同 同
堀 不漁

自家用車で競賣の延期頼みに來 同 同
同 同
堀 不漁

二次会へ行くハイヤーの賑やかさ 岡山縣 同
同 同
堀 不漁

坐り込みまでしたボーナスを飲んじま 同 同
同 同
堀 不漁

言い勝つた日の強情を淋しがり 米子市 同
同 同
堀 不漁

心うき／＼夏みかん投げ上げる 同 同
同 同
堀 不漁

麦秋がすんでお天氣続きだし 岡山縣 同
同 同
堀 不漁

占ふて見れば女房のままになれ 同 同
同 同
堀 不漁

ドアボーイ赤いネオンにたて立ち 貝塚市 同
同 同
堀 不漁

妻の留守濕つたまゝの海苔を噛む 同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

退院

病中吟

無理ばかり聞くのに妻が居つてくれ 岡山縣 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

同 同
同 同
堀 不漁

ジョンの死

麻生 梨里

に「種子」とあるが「子種」も賣るのか、料理屋に「みすか（今治の別称）」とあるのは「かすみ」とも読める、道理で仙人がよく来るそうだと。松山には臨月と云う料理屋があるが、女將は独身だと聞いた。大体料理屋には珍名が多い。若松あり、老松あり、まる井食堂ありカドヤあり、あつまやあり、にしやあり、翁堂に乙女堂、幸四郎あり、三亀松あり、菊家に梅家、白竜に黒竜、保川あれば、一方に「とく川」あり、保川の門標を覗いて見ると女將の名は「殿下せきよ」と書いてある。姓丈け聞けば一寸恐れ入る。

最近向いの犬が何者かに殺された。長屋はその話で持ち切りだ。犯人は三人位居たとかゴム靴をはいていたとか夜の間に殺された犬の臨終を見ていたように話す者があつた。

この犬はジョンと言つて誠にスタイルの悪い犬であつたが、よく吠える犬で番犬としては忠実な犬だつた。一寸人が通つてもうるさい程ほえるが長屋の住人だつたらどんなにおそく帰つてもちやんとよく知つていて決してほえない。そこで犬ざらいの私も安心しておれる。ところが一月程前から夜更に此の犬がしつこく吠えることが度々あつた。近所のA夫人がこれはあやしい者が居るに違いないからと注進してくれした。私の家は仕事の都合上夜更かしをするし、向いは朝が早いから心配はないでしようと思つたら、ローソクをつけて見に行くとそれは思ひ止まつて帰られた。その後もジョンがこんなイヤな吠え方をする事が度々

近頃は下女も知つてゐる勞基法 岡山縣 沖 一糸
 天井のしみに領土を連想す 同 龜崎 漫歩
 うまく世を泳げと云ふか鯉職 鳥取縣 同
 それ酒よ肴よ検査ます終る 同 井上 吉造
 終電へ女らしさを忘れかけ 京都市 同
 風鈴の音へドラマも夏の暮 マンネリズムへ毒づいてから氣をよこし 岡山市 河田 五風
 学説へ冷たく煙草の輪をふかし 同 倉田 錦川
 半丁は奴に冷す氣の配り 京都市 同
 簡単にすます二階の冷奴 同 美野 喜久
 どの窓も緑の風を入れて病む 貝塚市 同
 肺病めば問ひつ問はれつ 今日も暮れ 同 村本 香果
 京極の坂が凍てゝた幼い日 京都市 同
 あいの子はあいの子どうし秋の雲 同 小田 柳叟
 どうぞ先に寝て下さいと話こむ 貝塚市 同
 合住居傘の雫を睨まれる 同 佐野 牛歩
 貧なるが故の精勤褒められる 大阪市 同
 眼帯へ女の魅力見直され 同 白井三林坊
 市場籠靴下も入れ葱も入れ 岡山縣 同
 童謡に涙がにじむ旅の身に 同 上坂 朱人
 屈從という哲学を母は持ち 貝塚市 同
 院長を君づけで言い退院し 同 山本 利彦
 話したらわかれれば世話はないのだが 神戸市 同
 議論して勝つても大した事でなし 同 光好三四詩
 尻向けたままで行商断られ 岡山縣 同
 悪かつたと云わぬが二本つけてある 同 戸田 悦子
 赴任してから筆まめになつた父 高田市 同
 遠慮した菓子をかきりいな物にされ 同 村上 旭堂
 金の事にふれず全快した便り 愛媛縣 同
 いつからか僕の知らない流行歌 同 池戸 桃村
 退屈な顔へあみだのくじが来る 大阪市

理髪師は合間々々に髭をそり 吹田市 橋本 幸男
 揚額の將軍裸像と世は移り 大阪府 大橋 漫泉
 命懸けとはちと大げさな渦見舟 鳴門市 大塚五里棒
 結跡蹴坐組めば子供も眞似て見せ 奈良縣 平井 良兒
 永病ひ夫の浮氣を目で許し 大阪府 山名小豆島
 三輪車野球選手になると云ふ 高知市 松下 蘇水
 エロ作家頭はすでに禿げて居り 大阪市 西川 一舟
 花も咲く時もあらうとモク拾ひ 大阪市 飛藝 春風
 新樂えただひとすじに生きて居り 津山市 菱川 正巳
 共稼ぎ大の土産を買つて来る 大阪市 成田壽々女
 看護婦のマスクをどれば赤い唇 大阪府 松田 巨松
 踊るため送れと云へずアルバイト 岡山縣 難波 陽炎
 幸福に過ぎるも母の氣にかかり 堺市 丹波 太路
 闘病へ財産蒲團が一つあり 大阪府 友田 諷士
 スト時代何をもちき田植など 岡山縣 國正田吾作
 花避けてわざと若葉に杖を曳き 大阪府 平田 一色
 この家を小さくするにや金がいり 出雲市 多久和聖一路
 待たされる役でもうれしい恋で 山口縣 多田 穂波
 秀才と云はれて稼業継ぐ氣せず 大阪府 横倉漫太郎
 麦刈に火野葦平を不図思ひ 西宮市 小倉へどち
 新緑と云うに檢温器の冷たさよ 大阪府 田山 芳洲
 風鈴の下ネクタイをしめながら 岡山縣 稻吉 佳晶
 死を前に唯物論者の祈り淋し 大阪府 山本青道心
 両親によかししてゐては嫁きおくれ 熊本縣 鹿本 実信
 重忠となり金魚鉢ちと濁り 大阪府 松村 浜小
 力投が零対零の試合にし 鳥取縣 武田 粗粒
 めいである神父の木靴はいてみる 大阪府 青柳扇子仙
 肺病を知らずパンパン声をかけ 貝塚市 中塚 玉露
 妻族になれと育てた子でないに 岡山縣 池田 古心
 ちぐれ毛を悲しんだ時もあつたのに 香川縣 安倍 寛子

あつた後の事なので、これはテツキリジョ
 ンを邪魔者にしてゐるものゝ仕事に違ひな
 いと言ふことになつた。
 「昨夜ジョンが殺されました。用心が悪うお
 まつせ」
 と早速A
 夫人が臨
 時ニュー
 スを持つ
 て来てく
 れたのは
 四五日前
 の話であ
 る。その
 後一向に
 泥棒さん
 も来ない
 ようだが
 そうと聞けば確かに用心が悪い様な氣がす
 る。昨日も用事に出て帰つて来ると丁度A
 夫人とB夫人が門で話してゐる處でつかま
 つた。「こんな九尺二間の長屋、そんなに
 までして狙うやろかそれとも此處を通る人
 をつかまへて仕事しようと思つてゐるのや
 ろかと母が言つてゐる」と云うと、
 「いゝえ油断がなりまへんで」とA夫人が
 ひどくおどすので、私もいさゝか氣持が悪
 くなつて来た。
 「うちら本ばかりで何もあれへんけれど若
 し間違へて入つて来たら氣持が悪いわ」
 B「そうだな、本みたいな重たいもの持
 つて行かれまへんな。家から盗られるよう
 なもあれへんげぞ金出せ！なんて言われ
 たら嫌らしおまんがな」
 「出すお金があつたら怪我せんと済むけど
 無かつたら出されへんよつてに、此頃の
 泥棒言つたら素人やから命が危ないわ」と

瓶の銀山

大阪市長府
 西區一丁目四四

山銀硝子株式會社

電話堀川四七番

一路集

プリント 吉田水車選

判らない答プリントに誤字があり
プリントへ老眼鏡をかけ直し
プリントの僕の名前の薄い影
プリントと見られ度とい表紙にて
プリントのミスは税務所説明し
プリントへ少しは山もかけて置き
お茶汲みとガリ刷りだけの女事務
プリントへ大きな希望持ち初め
プリントに下手な略図もある講義
肝心なところでプリント字がかすれ
プリントの通り行事がはかどらず
プリントは白紙のまゝでベルが鳴り
プリントが渡れば教室小さくあれ
プリントへ暖い一つなし試験場
プリントだけは立派な講習会
プリントに子と共学の母せわれ
プリントの誤字に教養疑はれ
案内書先づプリントの文字をほめ

利彦 芳仙 同 寛 木 芳 方 古 代 鉄 陽 忠 美 同 光 良 正 雄 省 三

この客は税吏臭い目でしらせ 貝塚市 永吉 喜好
貧富の差瞬時忘れるパチンコ屋 香川縣 中山中納言
貸ボート時間と別な恋であり 今治市 越智 一水
歌になり画になる瀬戸の夕まぐれ 大阪府 永田六竜子
失恋をしてライバルのあるを知り 岡山縣 岡本 薫翠
拜借の浴衣で町を一廻り 石川縣 桑山 とも
家を焼く宝くじにも気がうごき 鳥取市 武田八方策
茶柱が立つて再婚進められ 大阪市 松元 利行
せむらぎの音して旅の夜だつた 貝塚市 野中 稔一

もう帰ろう女房のやつがやくんでな 大阪市 横田 方眠
サラダなど上手百姓へ嫁かぬ氣の 岡山縣 乙倉有樂子
復歸して又ボーナスへ氣を引かれ 大阪府 森本黒天子
寄せ書にふと日の丸を思い出し 高田市 戸田 嘉一
帰らうと弾いた玉がチンチャラリ 京都市 高岡 薫
用もなくまたも夜店を通り抜け 岡山縣 森永 天明
待人の有ることも知らず長話 岡山縣 森尾 不老
大掃除始めて知つた父の臍 下関市 加藤 司稜
盗み方までも落語はこまごまど 出雲市 佐藤まさる

研究会プリント読んだ丈のこと 格一
帯封のまゝでプリントはつこかれ 瀧年
丁寧な字句でプリント寄附にふれ 水堂
プリントの誤字論争の的になり 七面山
プリントにちやう自作の瑕が見え 十九平
プリントへ我が社の赤字またつき 方眠
プリントへペンだこがある平社員 山雨樓
プリントの説明二次会の夜のオウ 鮎美
プリントの埋め草春の影を持ち 同
佳・プリントへ落書きを講事終り 三林坊
佳・名文の苦勞プリントかえり見す 葉光
佳・プリントのこで拍手を意議する 祝平
佳・プリントに友の筆跡なつかしむ 瀧佐志
佳・プリントに秘秘とあつた負け戦 山雨樓
軸・君の字はプリント向きおだてられ 水車
軸・重大化するプリントとは知らず 同

註、此題の持つ意味は廣義に見れば映画、新聞、一般印刷、写真、最近流行の衣料等であるし又さうしたものを扱つた出句も、二、三あつたなれど良いものが無かつたので今回は所謂印刷代りのプリントとして選句した。

溜息 小川恒明選

溜息へ元氣を出せと猪口を差し 夢介

溜息を軽く笑つて脈を診る 大彦
内職の糊へ溜息つきあたり 芳仙
溜息をついてるばかり片思ひ 利彦
溜息をついて無心の口を切り 十九平
溜息へニンニク食べたな聞かれ 雄々
溜息をついて思案のゆきづまり 光男
溜息も黄色い声もかぶりつき 清志
溜息を尻目に四万台がすぎ 葉留路
溜息へ淀の競馬が浮ぶなり 摩天郎
溜息を妻に優しく励まされ 嘉一
憂見へ溜息の出る太りよう 悦子
藪医でも溜息つけば蒼くなり 潮鳴
溜息の出る夜の酒のほろ苦し 鉄兒
ため息を見せぬ心を思ひやり 英子
溜息の父は不遇に老給ひ 太路
親類が寄つても溜息出るばかり 風の子
溜息をついて始末書だけですみ 天明
溜息をついて意見が弱くなり ひかる
溜息は胃酸苛里を握つてるとよ 山雨樓
溜息が毎日毎夜留守家族 光郎
アベックの溜息仲居見逃さず 格一
溜息を医者年頃のせいにする 一糸
溜息をついて夜店の荷をしまひ 軸

私も一緒に危険説に賛成した。
B「金だせ！言うたらお金ないよつてにまあお酒でも飲みなはれ言いまひよか」
A「お宅ら、お酒があるよつてによろしおまつて、家ら困りまんがな」
と未亡人のA夫人は酒飲みの人を持つBの家庭を羨ましげに言つた。
A「うちもお酒を買つて来とかんならん、そやない、お酒ないよつて砂糖でもなめなはれ言わんならん」
犬死んだことと長屋に話題出来

溜息が思ひがけないとこで出る 瀧年
結局は溜息ついただけの恋 呆声
溜息をかくして酒をつぎこぼし 綠葉
溜息へ又履歴書を書き進え 三葉
溜息を他人が理由をきくたがり 不漁
溜息をつき／＼／＼くり出してやり 高志
溜息交りてシヤ／＼と嘘を云ひ 意坊
溜息の妓へ女將まで無理を云ひ 湖月
溜息と溜息腕を組みつゞけ 葉光
あきらめの悪い溜息見つけられ 同
強情へ溜息をして親が折れ 同
溜息をして思ふまい／＼ 芳泉
い／＼智恵も出す溜息をそつこする 同
溜息の妻へ欠伸が出てしまひ 谷水
電話口むこうも溜息ついてある 方眠
溜息をつかず子供の伸び盛り 五風
溜息へダイヤ燦然として光り 方大
溜息はお茶の冷えたも氣がつかず 水堂
溜息と知らず聲が聞き返し 祝平
溜息へうるさく蠅がとまりに來 鮎美
溜息へ幾らかすまぬ氣で座り 代仕男
溜息を叱つた方も当てがなし 祝平
溜息を仕掛火花に驚かされ 恒明



川柳江戸 武鑑 (三)

阿達義雄

(八) 武鑑と昇進

轉封・昇進・隠居・死亡等の場合には武鑑を改訂しなければならぬ。たゞ、之がほんの一部の改訂に止まる時は、版木その部分だけを埋め木して一様の黒くして置いたことは、武鑑を一目見れば分ることである。

櫻木(埋め木)をさせる御立身

——櫻木は版木。(五九)

御昇進研直させる武の鑑

(二一八)

大武鑑に載るのは、主として大名であるが、大名の下欄に、その藩の家老や用人も記され、又一万石以下の武士でも役附の者は、当然役人衆の武鑑に名が載つて居るから、武鑑にその名が記される様になるのは立身の結果に外ならない。

御立身櫻へのぼる武の鑑(四九)

御立身御名は楷書に改り(四四)

御立身御名も楷書に改り(四四)

御立身楷書に直る武の鑑(二五六)

須原屋の年号武鑑を例にとれば、大名及び家老・年寄などは楷書・用人などは草書になつてゐるのが普通である。町人などが、関心を持ち、實際利害關係のあつたのは、寧ろ此の草書で書かれてゐた連中ではなかつたであらうか。御やしきも武鑑も間口廣くなり

(四五)

右も、勿論、昇進の結果を

言つたもので、一万石程度の大名は精々一頁位に済まされてゐるが、大大名になると、詳しい系図や其の支配下の大名を込めて四丁(八頁)位に互つて記されてゐる。何しろ、加賀の前田侯の如きは十方石の大名を二人、一万石の大名を一人、即ち三人の大名を其の下に擁してゐるのだから大したものである。

(九) 武鑑・細見・遊女

大名の武鑑に相当するものとして、吉原の遊女には細見がある。然し、之は武鑑の武

張つたのとは違い、此処に記されてゐるのは、妓楼名・遊女名・遊女の格式符号・遣手の名など柔かい処ばかりで、武鑑から見やり細見は御家流

(宝暦七年十月五日)

——前句「和らかな事」

お家流は楷書に比して柔かな和様の書体である。尤も、この遊里に於ても、畫見世のつれづれなる時に武鑑などを待ち込んで、遊女がその馴染の留守居の名などを捜す様なこともあつたであらう。

畫見世へ武鑑留守居の名をさがし(一四二)

御留守居相手の遊女とあれば、この遊女は勿論、呼出しか畫三などの上玉に違ひない細見の高が武鑑の高をふり

(九〇)

吉原 三浦屋の太夫の筆頭の高尾は武鑑に於て、その知行高の高い伊達綱宗を振つたといふ俗説がある。又、岡場所の湯女などでも、勝山などの様な女になると、湯女とはいへ、武鑑に名の出てる留守居役・用人などに関心がなかつたわけでもあるまい。

武鑑見て居る湯女の立て物

(宝暦高點附句集俳諧紫苑舛)

湯女二人武鑑見て居る春の雨(タ)

細見のやうに女護の袖武鑑

(一四三)

最後の句は岡場所に限らず、吉原などに於て、女達が

暑中御伺

(柳人交歓のページ)

川柳雜誌社ハワイ支部

ワイロ一社

同人一同

鳥ヶ辻川柳会

南海電氣鐵道株式會社 川柳部

体溫川柳会

有 志 貝塚市名越千石莊

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 市場沒食子 | 多田 | 禿天 |
| 池戸 | 桃村 | 津村 |
| 井上 | 露芳 | 中谷葉菜子 |
| 橋本 | 幸男 | 牛田 |
| 橋本 | 峰春 | 尾崎 |
| 西川 | 惠風 | 小沢 |
| 西辻 | 竹青 | 山本 |
| 西口比呂志 | 藤田眞砂志 | 新陽 |
| 若林 | 草右 | 足立 |
| 金森小夜子 | 水谷 | 竹莊 |
| 吉田 | 斜水 | 森下 |
| | | 愛論 |

袖珍武鑑を見てゐることを言つたものであろうか。

改まりました大名女郎なり

(一九)

右の句は、武鑑の大名を細見の女郎と比較してゐるのが、不届だといふので、寛政の改革に於て創られた句である。

(二〇) 武鑑雜詠

武鑑の性質を語る句として

列公の姓氏をてらす武の鑑

列公は諸侯

(八四)

明鑑と武鑑くらゐぬ名を照らし

(九七)

「明鑑」とは何々明鑑などという姓氏録であらう。武鑑には諸侯の姓氏・系譜・官位・所領・居城・邸宅・紋章・槍印などに至る迄詳しく記されて居る。従つて、之は明細職員録とも言ふべきものであらう。尤も、大名以下の下位の者にあつては略式になつて居る。

四角は城持山形は座敷持

(二〇一)

細見の座敷持は晝三や附廻

しに次ぐ遊女で其の合印は卩即ち山形である。(その次の部屋持の合印は人)。大武鑑には城持大名の符号を附けて

ないものもある様だが、袖珍武鑑には、この符号が一々記入されてゐる。例へば、

百二万二千七百石加州金沢 國

但し、□内の地は黒で城の文字は白抜きになつてゐる。

用人が並ぶ武鑑の縁の下(天保)

殿様の下欄には、家老格の

者・年寄・用人などの名がす

らりと並んでゐる。

破れ武鑑押への羽織裾が切れ

(一四五)

大名列の後押へは、最後を警めて行く供廻り役で、

皆打裂羽織を着たものである

が、この羽織も大名によりそ

れ、違つてゐたので、之を

分らせる爲に、武鑑の各大名

の最後の欄の纏の図の下に、

その形及び背中印などが書

かれてゐた。たゞ長い纏を書

く爲に、その下の羽織の図の

欄が短小となつてゐるので、

その短小の欄に収めようと、

裾の方が短く切られた様にな

つてゐて、所謂燕の後押へといふ恰好にはなつてゐない。

(此の羽織の図は珍袖武鑑にはない。) 尙、直接武鑑を詠んだもの

ではなく、赤穂浪士のことを之に掛けて詠んだものとして次の様な句がある。

紫も浅黄にはじる袖武鑑

(二〇五)

紫は江戸。浅黄は浅黄裏武士で、浅黄・紫・袖等の語の連結を狙つた句である。浅黄裏

武士とは、こゝでは大石良雄

以下の田舎侍を指したものである。

うぬばれにならぬ四角な武の鑑

(七九)

慢心しない赤穂浪士。この

「武の鑑」は武鑑と考へるよりは武士の鑑の意味として解すべきであらう。

(完)

一品料理と生そば

グリル 芝 鶴

上六キヤビトル映

画館 東三軒目



高 鷲 亞 鈍

大 西 野 介

亀 山 晴 峯

益 永 貞 女

特殊紙器工業株式会社
大阪市阿倍野区晴明通一

川雜東京支部

川村好郎 武田登志

宮田不二 加藤守夫

植田千束 田中稻水

植田ひろし 清水一郎

石居高志 客員福田山雨楼

川雜篠山支部

酒井ひかる

田代尋四 速水眞珠洞

小西無鬼

博多店屋町
九州衣料株式会社社長



堀英四郎先生と語る

——ブライス教授の英訳川柳に就て——

阿部佐保蘭

平和の日を明日にひかえた四月二十七日牛込喜久井町の先生のお宅を終戦後初めて十何年ぶりに訪れる。焼跡に立派に立てられた新居の玄関を恐る恐るあけて案内を乞うた処思いがけなく和服姿のうちとけた先生の姿に接し懐しい氣持のまゝ應接間へ通される。御無沙汰致しましたという小生の肩を叩いて君一寸も変わつていないと親愛の情を示される。先生こそ戦前と一寸もお変りなく益々御元氣で偉大なる祖父に接した感じである。先生から久しぶりに積る話したいとおハガキに接したその通りなのである。川柳という一つの趣味を同じくしている丈で天下の堀先生にも逢つて戴けこんな親しい風景を点出出来るとは何と有難いことであろう。改めてこの川柳の生みの親である初代川柳に感謝の意を表しつゝ四方山の話に耽る。冒頭この度の戦火で犠牲となられた先生の奥様と、芝の香蘭女学校を出られたお嬢様(三女)お二人と女中さん並びにビルで戦死されたフランス風とでも云いたい一種独特の画を多く

された御今息の四つの写真に立ち上つて心から默禱を捧げる。この辺境の夷彈の落下のはげしさは想像以上で先生もよくその中を抜け出されたこと、今更ほんとうによかつたですれとその當時の話に耽ける。先生との対談は約二時間程の間であつたが、こゝでは特に川柳に關したものに止めて詳細は次の機会にゆずることにする。

(清美)

Fishing at night;

Calling out to someone

suddenly

"How round the moon is!"

Kiyomi

A man sits fishing in the

moonlight, another also, a lit-

tle way off. All is silent, bright

as day, the moon in the mist

of the dark sky. He cannot

help expressing his feelings

to the other angler: the langua-

ge of this verse distinguish-

es it from haiku; it is literal-

ly "the moon's roundness." The

man is not a poet, but he is

a man, not insensitive to the

round, silent, lovely moon.

暑中御伺

(柳人交歓のページ)

川柳雜誌社岡山支部

岡山市下出石町六二一

不朽洞会員

藤本満年

水田草骨

浜田久米雄

中村ただみ

逸見灯竿

木村千代男

鈴木九坡

田垣方大

大森風來子

水谷谷水

直原七面山

峰尾魚々

福島鉄児

佐々木告天子

服部十九平

梶原一善

大森娛句樂

田村藤波

延永忠美

岡田夜潮

大森苑女

中谷仙坊

大倉四案

藤本茶々

富士野鞍馬

東京都新宿区若葉
一丁目十五番地

川村伊知呂

大阪市南区桃谷町七一

「評」良い訳だ。夜釣している人は詩人ではない。月の丸い美しい月だと云う事に心奪われる。「口をきく」がよい。解説が良い。ブライスは天才的詩人だ。(筆者註)ブライズ教授は我が國に招聘された英國の文学者で三十余年に亘り日本を研究していられる方で日本人の妻をめぐり現在学習院教授をされている。

賣り拂う物の中から女房抜き

(丸柳)

The wife

Takes out some things

From those to be sold

Ganyu

A rag-iron-and-bone man comes, and the wife carries out some odds and ends to sell. As the man is weighing them she picks out one thing and then another that she now sees some use for. The cupidity, meanness, and triality of mankind are lightly touched seen asstance.

「評」絵が良し。絵がひんぷんと外人にもくひかる。

肩越しに火事を見つゝる長襦袢

(姫小松)

The nagabhan,

Looking over his shoulder

At the fire. Himekomatsu

The nagabhan is a petticoat-like undergarment worn by Japanese women under the kimono and when they sleep.

It is scarlet, and gives a rather

er erotic impression. In the middle of the night, when they were asleep, the fire bell rang. Getting up, they looked out of the window at the fire sufficiently far away not to be dangerous, satiffiently near to be exciting. The woman stands behind the man looking over his shoulder

「評」エロチックだ。外人がこう云うものを撰択する所がえらい。

ブライズ氏は長く朝鮮に居られた。奥様は日本人。五十五才位と

添乳して棚に鯛がわらわす

(古川柳)

Giving the baby the breast,

"On the shelf

You'll find some

sprats,

The wife is lying down feeding

the baby, and her husband

comes back home late, she tells

him casually that there is some

fish in the cupboard. When

a woman has a baby and espe-

sially when she is feeding it,

she is almighty. The woman's

language "gozariyasu" shows

that she was formerly one of

"those women, and takes some

pleasure perhaps, in putting

her husband in his place.

「評」わらわすが今に訳して分

らない。女が子供を養かして

ならない。男を使う事が出来る。胸倉の外に女房手を知らず

The wife

(古川柳)

Knows no other way, But to seize him by the lapels

This is a very simple

verse, but it shows the

difference between Japanese

and foreign woman, that they

are in capable of slapping and

pummeling a man.

「評」この方が解る。

里のない女房は井戸で怖らせ

(古川柳)

The wife without a parent's

home

Frightens him

At the well.

When Japanese couples quar-

rel, the wife often goes back to

her parent's home. This one

has none so she frightens her

husband by rushing out to

the well as if she is going to

commit suicide by jumping in.

「評」日本人でなければなら

ない詳細な解説を要する。

あの女房すんでに己れがもつ所

(古川柳)

That wife, —

I could have had her,

Almost.

He says boastfully that he

could have had as his wife,

but truth, which as Dr. Annunzio

says, is always looking at us

with its implacable regard,

makes him add, "almost"

「評」外國へ行つてもちへ行つ

ても良し。とにかくよく出来てい

る。一般の人は川柳を頭から下品

と決めているにも関わらずブライズ

氏はそれに眼をつけて英訳する処

川柳雑誌社

北 大 阪 支 部

黒川 紫香 石岡 正司
水谷 鮎美 鈴木 天貧
戸田 古方 木村 水堂
正本 水客 永田 六竜子
竹内 潮花 村上 ゆずる
阿万 万滴 松川 杜的
間島 青丹子 今西 鼓秋
野本 吞水 竹内 圭三
新川 博也 小池 成男
西森 花村 田中 吟嘩
長谷川 三司 武部 香林

大阪市東淀川区三津屋北通四ノ二九

川柳下關支部

國弘半休門

弘津柳慶

坂田良坊

石川侃流

川柳諺問支部

細野國定子

安部寛子

中山中納言

大西迷窓

川柳浜寺病院支部

膳所新三

川柳ながさ

池田可宵

長崎市新大工町

長崎川柳社

にえらさがある。以上は堀先生が
ブライス教授の英文川柳を拾ひ
みされての漫評を録音させて戴
いたので文責筆者にあることを附記
して置く。

壁間に飾られた額の中に我が敬
愛する英國詩人ブランデン氏のお
写真を見つけたので、ブランデン
さんではありませんかと申しあげ
たら先生は瞳を輝かし「そうで
す」ブランデンは僕の無二の親友
で一緒に肩を組んで撮った写真も
ある。彼は彼の履歴書に日本では
堀英四郎が僕の友達だと書いてい
るそうだ。今巴里に居られる御令
息共同通信特派員の堀義明さんか
ら送って来た写真をみせて下さ
る。それにはロンドン郊外汽車で
約三十分のエドモンド・ブランデ
ン邸に泊つて居られた時の写真で
ブランデン氏のお嬢さんを抱つこ
して氏の玄関の処でブランデン一
家と仲よく写っているほゝえまし
いシーンである。元英連邦代表
部教育顧問エドモンド・ブランデ
ン氏の序文並に現英連邦代表部
教育顧問GSフレイザー氏の序
文附「カナ登音と抑揚記号つき初
めて学ぶ人の英語会話」堀英四郎
NHK報道部外信課、慶大元講師
堀直行、共同通信社外信部堀義明、
共著大修館発行廿五版に、 Mrs.
Abe With Kindest Regard of
Fushio April 1932と先生自ら
サインして女子学院に今春入学し
た長女にと一部下すつた。誠に有

難い極みである。先生の著書は三
十二点あるがこの著書は「高等英
語社交会話」と並んで特に有名な
もの。先生は目下來春渡米する徳
川夢声の依頼で吉川英治の宮本武
蔵を英訳中尙文化放送に週に一度
水曜日「言葉のリズム」と題して一
ヶ年間連続で午後十二時四十分よ
り目下放送中その放送要旨を話し
て下すつた中にスピーチの主要
なものは三つある。即ちヒューマ
ー、美意識、創造力(Creativity)
大人になつてもみんな子供の様な
無邪氣さが大切、川柳は子供の
心、聖書に「もし汝等……があり
て幼児の如くならば人を動かすこ
とが出来るとある。大人が子供
から何を学ぶか、それは次の四つ
である。即ち誠実、信頼感、人を
許す心、物を見て不思議がる能力
である。子供は卒直に話す。大人
は明らかに物事を云う事を嫌う。
これではいつ迄たつても世の中が
明るくならない。Child likeこそ
教育者として学ぶ点がある。
自分は言葉のリズムに関心をもつ
ている。今年の一月二十日にNHK
の「ことばの研究室」で徳川夢声
氏と「ことば」というものという題
で対談したが、〃ことば〃とい
うものは表現如何で天地を動か
す。日用の言葉が藝術である。社
会を明るくする座談の藝術化こそ
緊要である。川柳にしても詠み方

で随分良くなる。セックスピアを
鑑賞する外人は色々の点から鑑賞
する。日本人は一つの角度から鑑
賞する。外人はあらゆる角度から
鑑賞するセックスピアは古典であ
りクラシカルなものでソネットの
方は韻が踏んであるが、劇の方は
無韻の詩である。詩を詠む調子に
はいかない。処が役者がいゝと立
派な台詞が出来来る。表現法の大切
なわけである。ブライスの英訳川
柳の訳はうまいが卒直にいうと音
を生かすように詠むとうまくない。
川柳の英訳は実にむずかしい。
あらゆる面を考えて訳さねば
ならない。先生は明治七平今治市
に生れ十一才の時當時十七才の
徳富芦花に英語を学ばれ十七才で
國民英学会の教鞭をとられ、傍ら
早稻田大学英文科に通われクラ
スメートに島村抱月がいた。岡山
一中、東京高商、慶應義塾大学の
教壇生活六十年に及ぶ。昨年十一
月二十七日丸の内工業俱樂部で英
詩人ジ・エス・フレイザーの発起
で内外有名人名士十人(中外人が三
十人)が集まり喜壽の祝をされた
が、そんな人とは思えぬ青年の情
熱をもたれた珍らしい方である。
次の來訪者が持つて居られるので
お邪魔してはと勿々に退去。玄関
迄見送られた先生の又是非遊びに
いらつしやいと云うお声をあとに
外へ出た。

暑中御伺

中島生々庵

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

木村孤浪

平塚市馬入二九〇

三條東洋樹

愛子

神戸市兵庫区神田町七九

川柳雜誌社弓削支部

丸山弓削平

直原七面山

福島鉄児

黒田笑泉

外一同

川柳雜誌社吳支部

吳市吉浦中町一丁

林野甦光

松永四季無

余頃紅児

愛知縣蒲郡局区内

堀込

旬刊川柳社

句稿締切二五日・一〇日

切手十円で見本送付

川柳貴生川支部員
山田季賛
山田スミ子

廣島縣阿佐郡可部局区内
龜山村綾ヶ谷



川柳今月の歴史 (八月)

●主要事件、行事、動静、人事等

大正十四年八月、川柳大連の東亞川柳大會に出席のため鮮満の旅に上る。昭和十一年八月、麻生路郎川柳職業人を宣言す。同十六年八月、警視廳では情報局と連撃の下に文藝同人雑誌の整理に着手、東京の柳誌も廃合整理を要求される。

●主要圖書の出版

大正八年八月(以下何れも八月につきこれを省略す)井上劍花坊著「川柳を作る人」が南北社から。同十二年横山巖著「難林川柳一家吟集」が難林川柳社から。同十三年今井卯木編「誹風柳多留拾遺」が柳書刊行會から。同十四年新星會編「川柳一九二四年集」が柳柳寺川柳會から。同十五年尾上夜半杖編「第五回川柳名句番附選句集」が川柳名句會から。同年野烟謹爾編「川柳五千句」が落東書店から。同年大連川柳會編「第一川柳大學」が同會から。昭和三年西原柳雨著「川柳年中行事」が春陽堂から。同四年篠原春雨著「春雨句集」が川柳山日吟社から。同年麻生路郎著「川柳漫談」が弘文社から。同六年岡田三面子著「岩波講座日本文学川柳」が岩波書店から。同年小林鶯里著「川柳の社會」が文藝社から。同七年麻生路郎選句「漫行進曲」が湯川弘文社から。同年木村半文錢著「趣味の川柳の作り方」が藤谷崇文館から。同八年坊野壽山著「花柳吟壽山調」が松花から。同十年井上信子編「井上劍花坊句集」が叢文閣から。同十二年前田雀郎監修「川柳講座第一巻」が川柳講座刊行會から。同十三年母袋未知庵著「川柳善光寺物語」が未知庵から。同十六年植木鬼佛著「川柳警察史話」が松華堂から何れも出版された。

●主要柳誌の興廢

明治四十一年麻生路郎によって「土團子」創刊。同四十四年、二年間続いた「獅子頭」が廢刊。大正元年柳柳寺川柳會から「大正川柳」創刊。「川柳」を改題したのも。同四年麻生路郎によって「雪」創刊。四卷二号まで出た。同年伊予正岡佛手柑によって「番茶」創刊。同六年本田溪花坊によって「繪日傘」創刊。同九年朝鮮川柳會から「南大門」創刊。八号まで出た。同十三年大連新川柳會から「白頭家」創刊。同年休刊中の「きやり」が迷亭らの手によって復刊。昭和三年「川柳使會々報」が大阪から創刊。同七年福島の「あけぼの」廢刊。七年間続いた柳誌。同九年宇和島市茅田五風によって「南予柳壇」創刊。同年博多學骨吟社から「川柳柳府後」創刊。同十年「秋田川柳柳社會報」創刊。後「秋田川柳」と改題。同十一年朝鮮の「長鼓」廢刊。三卷八号まで出た。同十五年東京彩雲川柳社から「彩雲」創刊。

●著名川柳家の他界

藤村青明は大正四年八月二日須磨海岸で溺死二十七才、柳壇の鬼才であつた。松本春花は同十四年八月十三日相模で逝く。前田青岸は昭和二年八月三日死去、神戸で「ツバメ」「柳太刀」を出した。西垣松雨は同年八月九日三十七才で急逝、川柳雜誌同人。森田心太は同五年八月一日東京で急逝、柳柳寺川柳會の人気者であつた。萩野四方路は同年八月二十八日三十五才で倒れた。番傘同人の健筆家であつた。望月十五夜は同年八月三十一日四十四才で病歿。番傘同人。池田柳舟は同六年八月三十一日三十五才で急逝。京都柳壇で活躍。川井舜二は同八年八月三十一日二十九才の若さで病歿、評論家として優れていた。廣島笑人は同十一年八月六日四十才で逝く。神戸、岡山、門司で活躍。安東花園は同年八月十一日永眠、福島の「川柳独活」創刊に盡した。高木角窓坊は同十二年八月六日六十二才で永眠、劍門の重鎮で柳壇の一方に重きをなした草詩堂を興した。釜永睡花は同十八年八月二十九日四十二才で病歿、ふあうすとの同人。高橋かほるは同二十年八月四日四十九才大阪で歿した。川柳雜誌創刊當時からの同人で大阪情緒豊かな異色ある作家である。小田夢路は同年八月六日廣島で原爆弾のために戦災死、番傘の大奮頭で信頼を一身に集めていた。享年五十三才。小林平吉は同年八月十四日北支で終戦の前日戦死。川柳研究社で異色ある作家であつた。

前田 伍健	松山市真砂町二一	横濱市保土ヶ谷区岩崎町一〇
増田 耕民	鳥取市川端一丁目三七	好日の日向へ子の爪親の爪
岡本 雄吉	高知市長浜局区内	長谷川 三司
橋本 晴之助	津山市美濃町	大阪府豊能郡箕面町箕面三七九
杉谷 湖山	鳥取市職人町	荒木 哲水
尼 綠之助	出雲市高松	魚つりは好き晩酌は一合也
金泉 万樂	大阪	水谷 鮎美
秋月 安方	和歌山市今福北部一八二	兵庫縣多紀郡日置村辻九八七
山口 如川	熊本縣菊池郡大津町	家 沢 薺花
三 猿堂	愛媛・津倉・曉童	大阪市阿倍野区王子町三ノ三四
長野 文庫	今治市神明町一〇〇	菊沢 小松園
東 喜久堂	大阪市旭区今市町二ノ一四九	大阪市阿倍野区王子町二ノ五三
飯田工場	大阪市東淀川区豊里菅原町	山本 葉光
群 星川柳會	大阪市東淀川区木川西ノ町三	阿倍野区阪南町西二ノ三三
		石田 沐天
		阿倍野区天王寺町北三ノ五五ノ一
		富岡 淡舟
		大阪市東住吉区田辺東之町七ノ三三
		小川 恒明
		大阪市西区江戸堀下通一ノ八
		小倉 へさち
		堺市九間町東一丁目山之口筋
		八木 摩太郎
		大阪市東淀川区木川西ノ町三
		西 森花村

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙・文字を正確
 ▼開催月日及場所記入▼締
 切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社七月句会 (大阪市)

七月五日 午後六時

於 大宝文化会館

暑さ厳しい祭りに這入ったが、川添いの会場は扇子の必要はなかった。定めの席に陣取った出席者は句三昧に入る。当夜は神戸の三條東洋樹氏の思いがけない参会に、珍客も迎えた会場は更に活氣を加えた。今回の鮎美氏の句評は鳥取の日淵子・岡山の弓削平・意坊、大阪の没食子・津山の白柳子諸氏の句が組上にのぼった。路郎師の柳話に賛をする時の心得から説き始め、凡て絵画でも川柳でも必ず余白を必要とする事に付き述べられた。東洋樹氏は「暴力」の披露前に先輩、指導者に積極的と消極的の二派ある事を述べられ、前者は批評や選が厳しいので、寄り付きにくい点はあるが、結局、後へ残るものは前者である。集まる人は少なくとも自分は其淋しさに一つの慰めを持つものであるとの氏の説に、一同沈黙の中に肯定の色が見えた。席題、兼題、の披露後ベスト十に呈賞、九時閉会した。当夜の不朽洞優勝カップ把持者は木下陶王氏であった。

出席者 路郎・春葉・紅山・雅集・玲人
 黙平・喜久堂・夕霧・香林・嘉一・悦子

三司・正司・白鳳・春齊・夢裡・没食子
 淡舟・勝豊・水堂・帆加夫・陶王・春柳
 生々庵・一ノ十・木声・黒天子・沐天・
 天貧・貴山・扇子仙・恒明・万滴・鮎美
 花村・摩太郎・塔仙・梅里・鴈骨・白柳
 子・小松園・東洋樹・いわを・古方・梨
 愛論・博也・嘉男・巖・木人・葎乃・梨
 里

兼題「蠅」 麻生 路郎選

午後三時蠅をたゝいて事務がひま
 んそうろうのはいとだけうまくなり
 箸つけるまでは女中が蠅を追ひ
 蠅一匹雄妓が取れば絵にもなり
 物好きな蠅は電車にさへ乗つて
 物指して蠅をたけ指しが割れ
 テコチンの蠅も追は集金よく喋り
 病人の同じところへとまる 蠅
 ハイを一入れて板場へこて来る
 復讐のように蠅打つ回復期
 一ト通りすんでめし屋は蠅たぐ
 蠅に似てやがて飛び去る男なり
 御馳走の毒見を蠅にしてやられ
 蠅とまる度に子のパン減つてゆき
 衛生展見てしばらくは蠅たぐき
 蠅取紙砂糖があつたばかりやう
 蠅一匹二匹蠅が向きをかえ
 税務署と聞いてハエ取紙を踏み
 蠅と蚊を退治て衛生モデル村
 腹立てた揚句に蠅取紙を踏み
 停年の黙々として 蠅たぐき
 満員のめし屋で蠅はにげあるき
 蠅の出した銚子へ仲居かしこまり
 王冠にとまつて蠅のおそれぬ日
 佛心になれども蠅のにくらし
 かんしやくな蠅一匹にあなぐれ
 兼題「日記」 中島 生々庵選
 見せる日記蠅も半分まで書き 三四詩
 子の病氣こゝから日記止まてい

盗み読む妻の日記に額を撫で
 不機嫌の日記一行で足り
 愛人に云へぬ言葉を書きつづけ
 景氣悪い日記書く手もふるへる
 日記フト虫が知らせてこも書き
 日記帳いよ／＼明日で勇退か
 母ちゃんへ貸したお金も日記にし
 色街のことは半分程書く日記
 淋しさに克つて日記を書いて眠る
 こゝ迄の日記は彼氏と同居り
 日曜の日記はあがた日だけ書き
 欺される男へ日記まじめすぎ
 挿画まで書いて娘の日記なり
 古日記そのイニシャルは今の妻
 うつかり書いた日記でヒスれる
 厭世の最後の日記にじむベン
 日記帳母の瞳が氣にかゝり
 古日記母の涙の過去を秘め
 ふるさとを想ふ日記に母達者
 子には子の生活があり日記帳
 絶筆となつた日記も供へられ
 絵日記の図案に親が困つて居
 法廷を古い日記が覆し
 見て欲しい日記机の上に有り
 大掃除若さへ触れて見る日記
 次郎長に不運が続く旅日記
 日記にも合掌と記入人まるし
 晴とだけ日記へ書いた日曜日
 父の日記が印税となる不倖
 けしゴムの跡若かりし日の日記
 ぬすみ見た日記不幸の始めなり
 隙あつく母の日記の一頁
 兼題「家主」 木下 陶王選
 細々と生活を立てゝある家主
 家主の子猫といつしゝ足で来る
 追立てた家主も同じ金詰り
 焼跡に家主の名前丈け残り
 一ノ十
 三司
 鮎美
 陶王
 淡舟
 恒明
 嘉一
 陶王
 葉光
 黒天子
 木声
 大介
 花村
 同
 鉄児
 春柳
 若菜
 帆加夫
 陶王
 葉光
 鉄児
 田吾作
 黙平
 悦子
 黒天子
 玲人
 鮎美
 十九平

小兒科
内科
性病科

安岡醫院

安岡三四郎

道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南⑤三二四六

家主また夫婦喧嘩に呼び出され
 立退きを迫る家主の酒の顔
 出るとこへ出ても結局家主負け
 家を賣る家主へ近所は額を寄せ
 変質な家主も話せばよくわかり
 それ其処の質屋が家主で御座し
 貸して居る家がだゞ減つてゆき
 店子もう家主の落目知つてある
 雨もりの家で家主も住んである
 雨もりへ家主わづ／＼呼び出され
 買手さへあればと家主賣るつもり
 二級酒に足りない家賃取りにく
 人の良い家主の家も雨が漏り
 台風一過家主だけが見舞に來
 パチンコ屋にせぬ約束を家賃し
 頑張つてドツサリ家主から掴み
 家主さんさか／＼一番いたんて居る長屋
 家主さん訪へば早速税のぐち
 手を焼いた家主うら／＼を向ける
 台風がそれて家主の無事な顔
 六法全書家主は弱いものを知る
 落れた家主へ修理云いそびれ
 家主のむかしは夢の多かりき
 席題「まじない」 戸田 古方選
 まじないも親馬鹿らしく信じて
 父子相傳のまじないを忘れてた
 白柳子

押ピンを底務が制限する不況 木陽子
押ピンが曲り歪んだ木の堅さ 妻楊子
押ピンで壁穴かくすプロマイド 侃流
蠅取り紙はいはいの子へ送る 柳慶
お茶漬でかきこむ蠅は箸で追い 蘇人
長尻の主賓へ蠅を追い疲れ 蘇人
給料を届ける見舞の花を届け 蘇人
火の車給料などは焼石に水 忠朗
給料日へつたかとの修理をし 伊三男
パチンコで給料位かせぐ腹 同
昇給をするに汽車止め電車止め 木陽子
神棚へ子の給料が供えられ 藤市
月半ばもう給料の日を数へ 妻楊子
資材課で昇給もせず肥えて居り 同
給料を聞いて女は下を向き 九呂平
給料日佛へ花も買つて来る 柳慶
昇給の辞令へ無駄な物も買い 米三
給料日女將に知れぬ様に去に みつる
アパートで今日は買ひ氣の給料日 土筆坊
月賦にはもうこり／＼の給料日 ほなみ
ゴム長も冷々とする梅雨続き 柳慶
つる／＼の細い上着に梅雨が晴れ ほなみ
新聞をかばふ配達雨にぬれ 蘇人
通勤車話題はごも今朝の記事 藤市
朝刊を夕刊の卓で見る田舎 忠朗
求人欄だけ読んで箸をとり 妻楊子
新聞を貸して氣安く話し出し 司樓
新聞を色々買つて汽車に乗り 侃流
新聞よりラヂオニュースを先に聞き 紫蓮
新聞が一日おくれて着く閑居 牛休門
暴力を否定しながら再軍備 良坊

岡山支部句会 (岡山市)

五月十七日

於山陽旅館
藤本 満年報

他人から聞いた話をたてにとり 祝平
スリルだけ求めて女誤解され 風來子
香水の匂い理性をいらだたせ 夢介

老嬢のあせり香水変えて見る 四茶
女生徒の笑いキヤメル一ッ落ち 八ッ茶
姑の聞えよがしの独り言 大介
婆さんの一人に馴れた独り言 茶々
内心を聞かす舞臺の独り言 大甲帽
兜町身のありたけをもつてくる 叱平
サラリーを賭けたスリルのパイを持ち 八ッ茶
スリルない生活が妻を老けさせる 谷水
登山バス曲るたんびに腰が浮き 忠美
藤落の記事が出た日に羽田立つ 満年
奇蹟的スリルが欲しい生活向き 美能留
行き過ぎたスリル新聞種になり 茶々
陳情の一人頼杖して不適 祝平
スリルよ彼の女運轉する氣なり たか代
継母ふと他人のような顔になり 九坡
他人から別れる話して貰い ベン郎
他人様ばかりの中でやせている 久米雄
頼杖で講議を聞いてやる若さ 七面山
書留の声に頼杖しやんと立ち 大甲帽
マ、の云う毒とは欲しいものはかり 千代男
毒ですと云われ酒好きまになり 三葉
狂言のつもりが薬きムすぎて 忠美

大牟田支部句会 (大牟田市)

六月廿日

於三葉保安課

篠山支部句会 (兵庫縣)

小西 無鬼報

忘れもの田植姿で買ひに行き ひろし
五月雨に一際目立つ娘のたすき 同
この筋が終つて飯にする田植 残玉
端午の節句も田植が済んでから 指月
初めての田植つはりをむしり出る ひかる
田植から神経痛がぶり返し 同

風流な田植うぐひすほととぎす 薺花
孫に手が放れ今年には植えに出る 同
新中生ボールの様に苗を放り 尋
早乙女の頭やつぱりパーマにて 無
開米になるかも知れん苗を植え 同
鬼四

小郡支部句会 (山口縣)

長野 井蛙報

詔問支部句会 (香川縣)

寛子

大聖寺支部句会 (石川縣)

細呂木魯木居

春風にかるいリズムで散歩をし 信星子
マドロスの団体酒場でむかえられ 敏子
団体と出合い荷車立往生 烈子
団体に身元きかれるバスガール 窓
団体の中の一人が枝を折り 迷窓

玉野市文化祭

中村たゞみ報

かつぎ屋の足も洗えずこの港 鴻峯
落ちふれた港肥丹だけが浮き 七面山
働きの破れを見せ居るズボン 一福
隠居などないといふ野良仕事 一福

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
大坂市東区豊後町四八
立川商事株式会社
タチカワピン
タチカワセム
タチカワ画鋏

版写謄田阪
二五町田芝区北市阪大
会商田阪 株式会社
番一九九五島福話電
番四一一三六五

働いた日の盃は軽く持ち 風來子
カーテンも子供の服も同じ柄 太郎坊
アベツクの憩ひの場所には風はなほ 千代男
アベツクのアベツク洋傘を上げ合つて 美勝適
アベツクで失業保険取りに行き 笑坊
鯛の値を聞いて鯛を買つて行き 北星
水族館鯛には鯛の泳ぎ方 風來子
七輪へ二つ乗つても鯛は鯛 大甲帽
読むぐらゐ読んぢけ鯛の調理法 雷山
式台の鯛は座敷へ通される 久米雄
猫の鼻こそばゆそうに鯛が焼ける 同

柳界展望



影撮氏水哲 (傳主社本) 行吟寺坂臺

ちか右列後・里梨・郎路・國松小・代道ちか右てつ向列前

氏諸の柳春・明恒・里海・子柳白・秋百・司三・莊竹・王露・莊島

日午後一時から材木町安國寺で開催。京都川柳社では今秋が柳誌「京」の四十周年になるので藤本蘭華、後藤千枝、紀二三三長老の謝恩句会を十月五日(会場未定)に開催されると。古川柳研究会(東京都)は七月六日午後一時、新橋駅前蔵前工業会館で開催すると。横濱川柳懇話会から六月一日に機関誌「横濱川柳」が創刊された。川柳青年部で六月廿日水間綴音へ吟行、帰途千石荘の体温川柳会を訪れ交歓句会を開いた。

▼石原青竜刀氏は東京都世田谷区瀬田町八四四へ轉居。酒井大徳未亡人きみさんが五月一日に、疎開先の経路で永眠されたこと、謹悼。

▼川柳雑誌社七月旬会は五日午後六時から三休橋の大宝文化会館で開催され盛会だった。大阪通信病院川柳会は七月十九日午後二時から五階講堂で開催。南海電鉄川柳会は七月廿一日午後五時半から粉浜の親和寮で開催。南区医師会文化部杏林川柳会は七月廿九日午後七時半から三休橋の生々庵居で開催以上何れも路郎主幹出席。市電交通局川柳会(大阪市)は七月十一日午後五時から局病院で開催。福岡川柳俱樂部旬会は七月廿七

として知られ曾つて川柳雑誌社と縣市親光親共催の山姥川柳大会で「山姥について」講演されたことが追憶される。池田可宵氏(長崎市)は対馬川柳会から招かれ六月廿五日に同会で講演、廿六日午後は中学で講演される由。高田養雨氏(東京都文



日五廿月五 館民公田福縣山岡於 (回二第) 会大柳川島水

編輯局に☆て

★「句三昧に暑さなし」と云う標語が編輯局にかゝつて、七月ともなれば——★裸で海水浴はいくが裸でカマタきや原稿書きはエライ仕事だ。慣れたソロバンをパチ／＼弾くような訳にはいかない。運動シャツ一枚で額から汗をたら／＼流して机にしがみついているのは、あまりいいかつこうのものではない。★こんごの表紙は二紀会の米田三男之介画伯を煩わした。★梅雨のさなかに、沢市お里で有名な壺坂へ吟行を試みたこの日だけ好天に恵まれてゆかいな一日をすごした。日帰りのこみあいの吟行地だ。まだ行つたことのない人たちにおすゝめしたい。★笠原路生氏が亡くなったので私は「川柳人としての笠原博士」を執筆故人を偲ぶこととした。★各地に水害がある。新聞を見て川柳人の安否を気づくばかりですまないと思うがほごこすすでもない。私たちの住んでいる住吉区も公園附近はボートで買物に出る騒ぎだったらしいが、私の方は土地が高いので何等被害がなかった。見舞状いただいて恐縮している。近ごろは一寸雨が降ると浸水家屋何万、一寸雨が降らんと停電、これでは困まる。代議士になるのに五当三落だと云うが五千万寄附すれば誰でも何人でも当選させてやつて、その金で、水害や停電だけでもない國にしたらどんなものであろう。選挙費も要らず手数もかゝらないでいいだろう。イカモノ代議士だつて議会で採り合う位は一人前にやつてのけるだろう。(路)

Printed in Japan

募集

課題吟募集

- 山 (十句) 石曾根民郎選
- 休暇 (十句) 高田抱逸選 (八月廿日締切)
- 急病 (十句) 北川春巢選
- 嵐 (十句) 國弘半休門選 (九月廿日締切)

毎号募集

近作柳樹雜詠廿句(麻生路郎選川柳塔(雜詠)麻生路郎選文章(評論・研究・感想其他)(毎月廿日締切)

投稿規定

- ▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
- ▼「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。
- ▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。
- ▼「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第七卷 第八号

定價 四〇四

(載轉禁) 半ヶ年概算 二六四四
一ヶ年概算 五二八四
昭和廿七年 七月廿五日印刷
昭和廿七年 八月一日発行

大坂市住吉區西門外西五丁目二五番地
編輯後援 麻生 幸 二 郎
行印個人 大坂市住吉區西門外西五丁目二五番地

發行所 川柳雑誌社
大坂市住吉區西門外西五丁目二五番地
電話 日 阪 大 阪 七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 303

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

海水浴直通バス

○助松海岸ゆき

8月17日まで 毎日運転(雨天中止)

上六發	9時	11時	13時
アベノ發	9時20分	11時20分	13時20分
歸着	16時	18時	17時
會費	大人120円	小人80円	

○近江舞子ゆき

8月17日まで 毎木・日曜運転(雨天中止)

アベノ發	8時30分	上六8時50分	歸着19時
會費	大人420円	小人300円	



お申込は

近畿交通社

上六プレイガイド 電(77)1970
アベノ案内所 ク 7710

酒販用紙コップ 食堂用紙製品一切



アイスクリームは
堅牢で衛生的な
この容器で

特殊紙器工業株式會社
フタバカツプ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋 (66) 2982 2983

避妊には..
ゼリー剤を!



★溶ける時間がい
らず速効且つ確実
で連用しても無害
★注入器で深部へ
送るからタンポン
に張り御使用を!

サンシーゼリー



1瓶 2 太郎 3 サンシー